

武漢時期の韋君宜

楠原俊代

はじめに	383
I 「犠牲者的自白」と「一段補白」	384
II 中共入党から湖北省委員会まで	390
III 抗戦初期の武漢と一二九戦士たち	398
IV 一二九戦士たちのその後	404
おわりに	411

はじめに

韋君宜（1917-2002、北京生まれ、原籍湖北建始）は、アンソロジーを除くと生涯に12冊の著書を出版している。そのうち11冊が文化大革命（以下、文革と略す）後の1980年以降に出版されたもので、60歳をとうにこえてからのことであり、人民文学出版社社長としての職責を果たしながら、その勤務時間外に、あるいは退職後、闘病生活を送りながら執筆したものである。文革初期には自殺を考えたこともあった⁽¹⁾ 韋君宜であるが、後期になると、一家は離散し、子供の1人は精神病となり、多くの友人や同志が非業の死を遂げたという状況の中で、こんなことをしてはいけない、自分の見たこの10年の大災難を本に書こう、書かなければならないと密かに志を立て、さらにはこの大災難で亡くなった、自分のよく知っている友人と同志のために列伝を書こうと決意するにいたった、と言う⁽²⁾。すなわち文革後、60歳をとうにこえてから出版された11冊の著書は、韋君宜が使命感を持って、大変な覚悟のもとに執筆したものと言える。

その韋君宜の作品の中に、数十年も前に書いた自分の文章についての注釈と補足が各1編ある。韋君宜はどちらも、文革終結後の最初の作品集といえる⁽³⁾ 『似水流年』（湖南人

民出版社、1981年)に、自分の書いた文章が当時の確かな証拠の「原材料」であり、「粉飾する余地のない歴史」である、との気負いのもとに、元の文章とあわせて収録している。その1つは1958年の「大躍進」を褒め称えた「一個煉鉄廠的歴史」(1958年)と「対夢囃的注解」(1980年)であるが、これについてはすでに論考がある⁽⁴⁾。もう1つは、「犠牲者的自白」と「一段補白」である。

「犠牲者的自白」は、1939年1月7日に重慶で出版された『抗戦文芸』第3巻第4期に掲載されている⁽⁵⁾。韋君宜は、21歳の時に書いたこの文章に、「一段補白」を1980年に書き足して補足説明をした上で、あわせて『似水流年』に収録している。「犠牲者的自白」は、1938年10月、中共湖北省委員会での工作を終え、武漢から撤退する際、わずか20歳であった恋人の孫世実(1918? -1938、江蘇呉江人)を日本軍の爆撃で亡くし、「ほとんど気も狂わんばかりの悲しみの中で」書かれた文章である。それに対し、「一段補白」では、青年時代であった当時について、「理想に酔いしれていたあのもっとも楽しかった日々」と述べ、孫世実はいささかの雑念を抱くこともなく、祖国のため、共産主義のためにすべてを捨てたのであり、このように生きられたら「幸福」なのかもしれないとさえ書いている⁽⁶⁾。

ここに記された韋君宜の体験と思いは個人的なものではあるが、それから40余年の中共革命の歴史を生き抜いての感慨でもある。1938年から1980年の間には、抗戦と内戦の勝利、新中国誕生後の30余年の歴史があった。当時彼らが日夜思い描いた「将来」である。この間、歴史の当事者として、韋君宜はどう生きたのか。何をして、何を見、何を感じ、何を考えたのか。本稿は、湖北省委員会での工作の最後に起きた孫世実の事件と、それに対する韋君宜の「補足」を手掛かりに、中共革命の実像の一端を明らかにしようとするものである。

I 「犠牲者的自白」と「一段補白」

孫世実が犠牲になった時はわずか20歳、職務は中共湖北省青年工作委員会委員、民族解放先鋒隊湖北省隊長。その前は中共宜昌区委員会書記⁽⁷⁾。父親は著名な社会学者で南京中央大学教授の孫本文(1892-1979)。韋君宜は、このような「学者の家柄」出身の青年が、生活の道はとうに決まっていたはずなのに、別の道——犠牲にいたる道を選んだのだ、と言う。孫世実は清華大学十一級、韋君宜は清華大学十級だから韋君宜の1学年下で、清華大学で彼らは知り合った。韋君宜は、「この優雅で優秀な江南の若者」は北平学連(北平市大・中学生連合会)の常務委員だった、と言う。

孫世実が犠牲になった経緯は、以下のとおりである。

1938年10月、武漢陥落の直前、党は兵を2路に分けた。1つは鄂中に行って遊撃戦をやる、もう1つは湖北省委員会とともに鄂西に撤退するというもので、韋君宜と孫世実は後者のグループに振り分けられた。韋君宜は招商局の汽船に乗って先に行き、孫世実は湖北省委員会組織部長の錢瑛（1903-1973、原籍湖北咸寧）について後から出発することに決まった⁽⁸⁾。このとき李声簧同志が重病で歩けないので錢瑛と孫世実がずっと彼についていた。韋君宜が乗った汽船のチケットは錢瑛、李声簧、孫世実も購入していたが、あまりに満員だったので病身の李声簧には無理ということで、チケットを無駄にした。最後に日本軍の武漢占領の前日、錢瑛と李声簧、孫世実は一緒に八路軍武漢弁事処がチャーターした「新昇隆号」汽船に乗って武漢を離れた。汽船が武漢を出発すると間もなく武漢は陥落した⁽⁹⁾。

「新昇隆」は、その時武漢から遠くない嘉魚燕子窩に停泊していた。多くの人は上陸したが、錢瑛、孫世実、李声簧を含む、省委員会のその他の数人の同志が上陸しなかった。突然武漢のあたりから日本の飛行機が来て、この船を見つけると低空掃射し、爆弾を投下した。このため船で火災が起きた。この時泳げる者は次々に河に飛び込み、岸に向かって泳いだ。泳げない者も木切れを抱きしめて河に飛び込むしかなかった。錢瑛も河に飛び込んだが、後に小舟に救助された。するとひっくり返った四角い机が河を漂ってきた。その机の中には人がひとり腹ばいになっていた。救助すると、李声簧だった。李声簧にたずねたところ、頭上で機銃掃射され、すぐそばで大きな火事になった。危険が差し迫り混乱しているさなか、孫世実河に飛び込まずに、まず船室に飛び込んでこの机を探してきて、逆さまに引っくり返して船の端に置き、また船室に入って李声簧を抱きかかえてきて、次に机をひっくり返したまま河に浮かべ、李声簧をその中に置いた。それから孫世実はようやく自分も河に飛び込んだが、遅すぎた、と言う。孫世実はこうして帰らぬ人となった⁽¹⁰⁾。

当時、「ほとんど気も狂わんばかりの悲しみの中で」書かれた⁽¹¹⁾のが、「犠牲者的自白」である（以下、頁数は『似水流年』のもの）。

文章の書き出しは、「本当に私の恋人は敵機のもとに犠牲になった」である。物語でもなく、ペンで書かれた歌うべき泣くべきドラマでも映画でもない、本当の災難が私の頭を打ちのめしたとき、私の感情はもはやそれに対処する力がなく、どうしてよいかわからなかった、と記したうえで、「親愛なる友人のみなさん！あなた方がこんな経験をしたことがないのなら、私のこの時の気持ちを想像するすべはないだろう」と述べ、「中国の数百万人が私のような日々を過ごしている」ことが今わかったと言いながら（14頁）、自分の混乱した心の軌跡を、ありのまま饒舌なまでに克明に記してゆく。

彼が確かに死んだことがどうしても信じられなかったこと、大きな気力を振り絞ってそれを自分に信じさせようとしたこと。韋君宜は、彼は帰ってくるに違いないと思った。一

縷の希望のあるところへ手紙を書き、電報を打ち、訪ねた。一生のあらゆる希望を彼が生きているかもしれないというその一点にかけ、静かに彼が来るのを待った。しかし時間がたてばたつほど、自分が彼の死を信じたくないという以外に、彼が生きている根拠を見つけられなくなった。韋君宜は毎日、彼が被害にあった地点の地図を仔細に眺め（15頁）、やがてこれまでに見たり聞いたりした、あるいは本や新聞に掲載された爆死死体の姿を彼の体に重ねた。血肉が吹き飛び、足が木にひっかかり、腸が何尺も垂れていたり、肉片が壁に張り付いていたり……。韋君宜はそれが彼だと想像した。今彼はそんな姿になってしまったのだ。永遠に生き返りはしない。二度と話せない、笑えない、彼の唇はもう魚に食われ、魚は唇を飲み込んでしまった。彼の血肉は噛み砕かれた、ちょうど私たちが魚や羊を食べるのと同じように。韋君宜は努力してそう思った。それからまた昔彼が韋君宜と談笑したときのことを思い出すと、はじめて感電したかのように、涙が出た。韋君宜は激しく、狂ったように、我を忘れて、ひたすら泣いた。

泣くのは唯一の方法だった。胸も痛み、頭も痛んだ。ひとしきり泣くと涙も枯れた。また泣いた。泣いて死ぬことができないことが恨めしかった。韋君宜は、はじめて、彼はもういないことがわかった。永遠に彼はいないのだ。ほとんど発狂せんばかりだった。生きていたくなくなった。他の人も恨めしかった。逃げられたかもしれないのに彼は死んでしまった（16頁）。韋君宜は理性を失っていた。誰が彼を殺したのかを忘れていた。二人の運命を呪った。

自分のつらい運命を嘆いた。韋君宜は工作与責任と事業のことを忘れてしまった。自分がいったい何者なのかを忘れてしまった。読んだ本や平素の言論、自分の思想や信仰を完全に忘れてしまった。韋君宜は愛する人を失ったかわいそうな女性、昔の小説や詩詞の薄命の、月を恨み花に憂えて涙を流す女性と同じになった。農村の悲惨な運命の中で、神仏にすがって泣く村娘と同じだった。韋君宜は自分を見失っていた。絶望！韋君宜は無神論者だったが、苦痛の中で神を求め、祈り、占った、と言う（17頁）。

しかし韋君宜は「村娘、典型的な中国人女性」にはなれないことを恨み、すぐさま対処する方法を考えざるを得なかった。どうしてよいかわからず、自殺を考えたことから仇を討つためだけに生きようと決意するにいたった経緯については、次のように記している。

本を読んでも彼と話したくなり、何かを書いても彼に見せたくなり、新茶を飲んでも彼に飲ませたくなくなった。このとき彼はバラバラになって川に浮かぶ水死体になってしまったことに気が付く、私はどうすればいいのか。生きてゆけない。一度ならず自殺を考えた。毒薬も手に入れた。それまでも死を恐れはしなかったが、遠いものであ

た。しかしどんなものか本当のところは知らなかったのである。もっとも親密な人が突然死に、死は私のドアのすぐ外に立っていることに気が付いた。死と生は同じように普通のことであり、同じように簡単なことで、何の違いもない。手を伸ばせばつかめるものだということがわかった。死、死、死、この思いは私の頭の中を何週間もめぐり、夜も昼もそれと戦った。死にたいという思いと戦った(18頁)。このとき死は、私にとってもっとも簡単で心地よく平穏な道だった。私が死にたいという気持ちは、彼が活着しているときに一緒に居たいと思ったのと同じくらい強烈だった。何度も毒薬を飲もうと思った。しかし私の理知がそうさせなかった。そこで私は毒薬を片手に、もう一方の手で敵軍の暴行や抗戦の現状、革命の前途などの本を読んだ。一字一字かみしめながら、私の死のうという気持ちを飲み込みながら。これはなんという苦い味だ。しかし死ぬなら良く死のう。こんな風に死んだら彼に申し訳がない。私は彼の仇を討たなければならない。ただ仇を討つためにだけ私は生きるのだ。

どんな方法で報復するかわからなかった(19頁)。しかし今私は、自分が人を殺せることを知っている。私は人に害を与えない。人が私に害を与えた。今私はこの世のどんな残忍な行為も何の躊躇もなく敵に与えられる。恨みを晴らす。恨みは弱者、心優しい者に自分を忘れさせ、誰よりも凶暴に、残酷にする。命さえいらぬのだ。天下に恐れる何があるろう。捕虜の優待にも断固として反対する。今手元に日本の捕虜がいれば、私は刀でその眼をえぐり、その耳と鼻をそぎ落とし、心肝をえぐりだし、彼らを爆殺された人と同じような目にあわせてやる。多ければ、1人また1人と殺す。1人も生かしてはおかない。彼らにも、夫を亡くした妻、父を亡くした子の思いを味あわせてやる。

このときになってはじめて比べようもない恨み、民族の恨みに思いが至った。私の経験は空前のものであり、民族の惨禍は空前のものである。かわいそうな中国の同胞たちよ！これは想像もできないほどの巨大な災禍なのである。遼寧から吉林、黒竜江……広東に至るまで縦横数万里のあらゆるところで私のような惨劇が生じている(20頁)。……私はわからない。なぜまだ講和できるのか、抗戦しなくてもよいと考える人がいるのか(21頁)。

身を捧げなければならないことは知っていたが、こんなに早く死が私のところにまわってくるとは思わなかった。しばらくは砲火のないところで話したり書いたり逃げたりできる、最小の範囲の中で自分のためのささやかな楽しみは残されると考えていた。しかし今私は日本の飛行機に感謝する。それは他でもなく私を攻撃し、私の大切な人を滅亡させた。

民族の祭壇の前で、ある人は金銭を捧げたといい、宝物、筆墨、労力を捧げたという人もいる。しかし私は大きな声で私の愛する人を捧げたと宣言する。私はそこで下がろうとしたが、民族の神霊は私に「駄目だ、まだあるだろう、自分の命が」と言った(22頁)。私にはまだ自分の命が1つ残されていた。この他に、愛も、喜びも、前途も完全に失ってしまった。最後に残った命があるだけだ。私は惜しむことなく捧げよう。生きていくのは困難なことだ。私はただ仇を討つためにだけ生きる。私の仇は中国の仇、われわれの百年来の一万里四方の祖先の深い仇だ。

私は銃弾を敵の胸に直接打ち込み、敵の血を私の刀で流させる。敵の血を見るために私は生き続ける。この他に私は何の目的も考えもない。

親愛なる友人よ。あなたがたの運命が私にならないことを希望する。しかし私にはわかっている。敵を中国から追い出さなければ、あなたがたの運命はいつでも私と同じようになる。どうすればよいか、あなたはもうよく考えただろうか。1938年(23頁)

以上の「犠牲者的自白」に韋君宜が補足した「一段補白」は、「犠牲者的自白」は1938年末、重慶の『抗戦芸芸』に発表した、今から40年ほど前のことである」という文章で始まる。韋君宜は、当時友人たちから褒められもしたし、彼女のことを心配してくれる人もいた、さらに「文革」中には、この文章のために少なからず批判され、闘争にかけられた。そして、韋君宜は今もう一度読み直してみると、一種の異様な感情を抱くと言う。その「異様な感情」とは、孫世実が「あんなにも若くして革命に命を捧げたということは、まさに一種の幸福なのかもしれない」というものである。苦痛を後から死ぬものに残しただけで、孫世実は、犠牲になるに臨んできつと心安らかで得心していたであろう、と考える。当時ほとんど気も狂わんばかりの悲しみの中で書かれたこの「自白」を、今韋君宜が批判するのは簡単なことである、小資産階級の狂熱であり、また立場を喪失した……、と言う。おそらく、文革中にこのように批判されたのであろう。しかし韋君宜は、この文章について「今思うのはまず批判することではなく、40年も経ったおかげで、すでに過去のものとなったあの苦痛はとうに洗い流されてしまったはずなのに、今それを回想しての私の苦痛は、過去よりも一層深刻なのである——もちろん別の性質のものであるが」と述べる(24頁)。

1938年末、21歳で、愛も、喜びも、前途も完全に失い、最後に残ったのは命だけ、その命を惜しむことなく捧げよう、ただ仇を討つためにだけ生きる、と宣言した時よりも、それを回想した韋君宜の1980年当時の苦痛のほうが一層深刻だとは、いったいどういう

ことなのか。

韋君宜はこの後、孫世実の経歴などについて述べ、「抗戦が勃発すると、皆は南方へ赴いた」として、湖北省委員会での工作と孫世実の殉難にいたる経緯について回想する。湖北省委員会での工作については、次節で述べる。

韋君宜は、孫世実の死について、「彼は泳ぎがうまかったし、船は岸から遠くもなかった、彼は爆撃のために亡くなったというだけではなく、同志を救出するために、自らの命を犠牲にした」「彼はきっと同志に対する無私の熱愛と、共産主義に対する光り輝く理想を抱いて、従容として犠牲になったのであろう。もしも無念であるとしたら、おそらく終日思い描いていた「将来」を目にすることができなかつたことが無念であるだけだったのであろう。これが「犠牲者の自白」で述べた青年である。また私——あのときわずか21歳であった娘が、それから30年後に批判闘争にかけられることになる、この文章を書いたことの由来である」と言う。

韋君宜は、以前は孫世実が解放を見ることができなかつたことに償いようのない無念さを感じたものだった。1962年にもそうだった。韋君宜は1962年、四川から武漢まで長江を船でくだり、孫世実の亡くなった嘉魚燕子窩を通過した。この時、昔のことが心に浮かんで消えず、韋君宜は彼の英霊を訪ねてどこへ行けばよいのかわからず、1人でそこに立って彼を悼み、低い声で「五星紅旗迎風飄揚」を歌い、彼の魂を慰めた。韋君宜はこの夕日に赤く染まった山河は、まさに彼とその同志らが血と引き換えにしたものであると思わずにはいられなかつた、今、韋君宜だけがそれを見ることができ、彼は見ることができず、と涙を流したと述べている（30頁）。

しかしその後韋君宜は、逆に彼をこそ羨むべきであり、悲しむべきではないと思うようになったと、1980年「一段補白」を書いている時点で述べている。韋君宜は、「彼はあのようになんて純潔なままで亡くなった。私のこの数年のあらゆる苦痛をまったく感じることもなく。彼を悼む必要はまったくない」と言う。彼はいささかの雑念を抱くこともなく、新中国のために死んだ。祖国のため、共産主義のために、全てを捨てた。彼の年若い恋人である韋君宜のことも含めて。これは崇高な境地の死である、このように人生を生きることができたら、幸福ではなからうか、と韋君宜は言う。その後、牛棚や幹部学校で、特に「犠牲者の自白」のために批判闘争にかけられていたとき、韋君宜は「青年時代に理想に酔いしれていたあのもっとも楽しかった日々をたえず思い続けていた。そればかりか「犠牲者の自白」を書いていた時のあの苦痛は別の意味で愉快ではなかつたのか、とさえ思われた」と言うのである。1938年に、韋君宜は一方では泣きながら、もう一方では仇を討とう、戦いたい、昂然と「将来」のために犠牲になりたいと思えたからである。「刀鋸鼎鑊有り

といえども、甘きこと飴の如し」、それは人生最大の不幸なのではない、と言う（31頁）。
韋君宜はさらにつづけて、以下のように述べている。

幸いにも生き残ったこの私は、こんなにも長く生きてしまった！私は彼らが思い描いた「将来」にまで生きてしまった。これは彼がそのために若い命を捧げた「将来」なのである。私は全てを見た。自分が闘争にかけられたことも、10年の災難（文革）と、その中で吊るし上げられ、殺されてしまった白髪頭の錢大姐（錢瑛）も、10年の災難の後また浮かび上がってきた多くの残滓も含めて、全てを見た。前の文章を読み直してみても、私の心の全てを説明することはできない。光明、理想、愛情、犠牲、残酷、愚昧、民族、国家、運命……これらの全てが複雑に交錯していることを、小孫（孫世実）は思いもしなかつただろう。この「将来」の姿を彼は思いもしなかつただろう。彼のあんなにも純潔な熱い血は、無駄に流されたのではあるまい。人々よ！こんなにも純潔だった熱い血を、水のように流れるに任せてしまうのは、犯罪ではないのか！こんなことでどうしてよいものか？彼らの熱い血と引き換えにした山河を、どうして手当たり次第に踏みつけにするのか？このことにこそ私は真の苦痛を感じる。——あ のとき彼を亡くした苦痛とは、比べられない程の苦痛を感じるのである。私は老いた。私の果てのない感慨で、いまもお困難の中で戦っている戦闘者の心を傷つけることは本意ではない。ただ簡単にありのままにこの「一段補白」を書いて、40年前に書いた文章の不足を補うことにする。1980年（32頁）

孫世実の死について、人生最大の不幸ではない、むしろ幸福でさえあり、彼を悼む必要はまったくなく、と韋君宜が考えるようになった原因は、1938年当時思い描いていた「将来」、孫世実がそのために命を捧げた「将来」を、中華人民共和国成立以後30余年も生きてしまったことにある。その間、韋君宜が闘争にかけられ、錢瑛が殺されたというだけでなく、文革とその後に浮かび上がってきた多くの残滓も含めて、韋君宜は全てを見たからであると言う。それでは、その「将来」においていったい何があり、それについて韋君宜はどう考えたのか。その前に、まず韋君宜がなぜ中国共産党に入党し、湖北省委員会で工作するにいたったのかについて見ておこう。

II 中共入党から湖北省委員会まで

韋君宜は、蔣南翔（1913–1988、江蘇宜興人、清華大学中文系九級）が「私に革命を教え、

私を入党させた」⁽¹²⁾、また韋毓梅（1913-1968、江蘇塩城人、清華大学中文系九級）を「私を導いてくれた人（引路人）」⁽¹³⁾と述べている。韋君宜は1934年に清華大学哲学系に入学し、年末には校内の革命組織「現代座談会」に参加、マルクス主義を学習しはじめるが、間もなく現代座談会は解散された。現代座談会は韋君宜が初めて参加した革命組織であった。さらに1935年12月、一二九運動に参加、1936年1月、平津学生「南下拡大宣伝団」に参加した後、間もなく蔣南翔の紹介により、中国共産主義青年団（以下、共青团と略す）に加入、5月には中共黨員となった⁽¹⁴⁾。韋君宜が蔣南翔と知り合ったのは1934年末のことで、中共入党の紹介者も蔣南翔であった⁽¹⁵⁾。

現代座談会は革命組織だったとはいえ、韋君宜はそのことを知らなかった。同時に清華大学に入学した毛櫛が学術活動だと言って、韋君宜を熱心に引っばって行き、訳のわからないまま、図書館前の大橋で会員を公開募集していた現代座談会に参加を申し込んだ、と言う。毛櫛は韋君宜より2、3歳年長で、南開女子中学の同学であり、最初から現代座談会の執行委員だった。しかし清華の宿舎に軍警が毛櫛を逮捕しに来る騒ぎが起き、毛櫛はその時は逃げるのができたが、現代座談会は、成立して半年で解散された⁽¹⁶⁾。

現代座談会の指導者は徐高阮（1914-1969、浙江杭県人）。韋君宜はこの会で蔣南翔と同じ哲学組に編成され、ここで学校ではまったく教えない『弁証法唯物論教程』を学んだ。蔣南翔はいくらも年長ではないのに先生のようにだった。片方の目があまり良くなく、青年の活発さはまるで無かった。大学に入学したばかりの韋君宜は、男子学生と話もできないほどだったが、蔣南翔によってはじめて男子学生に対する躊躇と警戒心を持たなくなり、それから男子学生と自由に話すようになった。韋君宜は、当時、会員の徐高阮、蔣南翔、高承志が共産黨員であり、現代座談会で積極分子を物色していたのだとはまだ知らなかった、と言う⁽¹⁷⁾。

その後について、韋君宜は「她死得好惨——哭韋毓梅」の中で次のように述べている。

1935年日本帝国主義はあからさまに華北を侵略し、蔣介石一派は一日中「親善睦隣」と叫び、学校は間もなく維持できなくなろうという時、われわれ数人の女子学生は気でもふれたかのように集まっては国家の亡国の運命について議論し、救亡歌を歌い、心の苦悶を紛らわせていた。韋毓梅はこの時にはもう秘密の共青团員で、彼女はひとりひとりわれわれと話して、「早く組織しましょう」と言った。こうして彼女を含めて6人が清華で最初の女子学生の革命組織——民族武装自衛会を成立させた。われわれを指導し、われわれの小組の会議に出席したのは蔣南翔。後にわれわれのこのグループは積極的に一二九抗日救亡運動に参加した。

韋毓梅は全校の、また運動のリーダーで、清華大学の（共青）团支部書記であったが、それは後で知ったことである⁽¹⁸⁾。

清華で最初の女子学生の革命組織が民族武装自衛会だったということは、その後ずいぶん経ってから、韋毓梅からはじめて聞いたもので、会のメンバーはこの組織の名前さえ知らなかった。韋毓梅が韋君宜らを加入させ、指導したが、彼女たちにそれを感じさせなかった⁽¹⁹⁾。

この組織は秘密小組であり、成立したのは1935年9月。二院の蔣南翔の宿舎（彼は1人部屋）で毎週1回会が開かれた。そこへは1人ずつ行き、また1人ずつこっそりと戻った。このようなやり方は、韋君宜らに神秘的で神聖な感情を抱かせた。蔣南翔は韋君宜らを教えて華崗（1903-1972、浙江衢県人）の『中国大革命史』を読み、どのように会を開くかの方法を教え、毎回順番に「時事分析」「工作検討」「自己批判」「工作の割り当て」の4項目について討論した。工作とは、女子学生の中に公開の時事問題討論会を組織し、流通図書館を成立させ、この小組を拡大させることなどである。『中国大革命史』の見解については、歴史を学んでいる韋君宜らも知らず、韋毓梅がどこで手に入れたのか、どこで学んだものかについても、他のメンバーは知らなかった。韋君宜はこの会で初めて時事をどのように分析するかの方法を知った。世界を2つの陣営に分ければはっきりするのである。蔣南翔はさらに紅軍というものがあり、もう黄河を渡ったことなどを教えてくれた。すべて、これまでに聞いたことのない不思議なことばかりだった⁽²⁰⁾。

韋君宜は、1935年12月には積極的に一二九抗日救亡運動に参加。この前後、処女作と第二の短編小説を天津『国聞週報』と天津『大公報』に発表する。1936年1月4日、平津学生「南下拡大宣伝団」に参加。16日、韋君宜の参加していた「南下拡大宣伝団」第三団は燕京大学に「中国青年救亡先鋒団」を設立。これは後に第一団、第二団の設立した組織とあわせて「中華民族解放先鋒隊」（以下、民先隊と略す）と総称されるが、韋君宜はその最初の隊員の1人となる。

間もなく蔣南翔の紹介により、共青团に加入、5月には中共黨員となり、中共北平地下党の幹事となる。北平の社連、婦連、民先隊の工作に参加し、大学の授業には減多に出なくなって、ほとんど職業革命家のような生活を送る。

韋君宜は、革命工作に参加するようになって、蔣南翔が清華大学党支部書記であり、その後北平学委（中共北平学生運動委員会、1936年10月成立）書記となったことを知った。蔣南翔は見たところごく普通の大学生であり、当時の幹部は皆このように若い普通の大学生だった。韋君宜はどうして蔣南翔に導かれてこの道を歩んだのだろう、最初、韋君宜は

彼が共産党員だとは知らなかったし、毛沢東（1893-1976、湖南湘潭人）のことについてはもっと知らなかったと言う⁽²¹⁾。

韋毓梅もまた同学の中では依然として普通の人のままであった。韋君宜が共青团から中共党員となった時、城内の組織から清華に戻って团支部書記を訪ね、手続きするようにと言われたが、韋君宜はどうすればよいかわからず、韋毓梅にたずねたところ、团支部書記は彼女だった。韋君宜はそこではじめて運動の中で彼女が指導仕事を担当していたことを知った。最初の6人の小組はこのときにはもう数十人もの女性民先隊員に拡大していた。108人の女子学生中およそ半数を占めた。化粧をしていた女子学生は明らかに劣勢となり、右派はいうまでもない。韋君宜らが密かに「中間分子」と評していた女子学生らも、小組の組織した演劇の上演や壁新聞コンクール、春のキャンプに参加するようになり、左寄りとなった。韋毓梅は人知れずどれほどの心血をそそいで革命の隊伍を拡大したかしのれない、「彼女でなければわれわれが前に向かって進む道をどうして切り開けたらろうか」と韋君宜は述べている。1936年夏彼女は卒業し、上海に戻って女工のタブロイド版の新聞を編集した。韋君宜は、彼女がおそらく職業革命家となり、労働者工作をしているのだらうと推測した⁽²²⁾。

1937年7月、盧溝橋事件が勃発すると、韋君宜は天津仏租界の家に戻る。8月28日⁽²³⁾、家から南下して復学する許可を得て、塘沽から広州行きの汽船「湖北号」に乗る。広州までは代々付き合いのある家の年長者が同行し、広州からは粵漢鉄路で漢口に向かい、国民政府軍事委員会行営參謀処長の2番目の叔父が出迎え、復学の手配をすることになっていた。ところが韋君宜は仮病をつかって青島で途中下船し、済南、太原から石家荘を経て漢口に到着。10月下旬、漢口から長沙臨時大学に行き登録し、「臨大」文学院哲学心理教育系4年となるが、民先隊本部はすでに山西省臨汾に撤退し、党組織とも連絡が取れなくなっていた。そこで学業を捨て、党との連絡先を捜しに武漢に行くことを決める。1937年秋から冬にかけて、武漢では抗日救亡活動が活発化し、日本軍占領地区から逃げてきた学生や、上海から撤退してきた進歩的文化人や各種団体が集中した。中共長江局の所在地でもあり、湖北省委員会の再建工作も始まっていた。韋君宜は武漢大学でしばらく聴講した後、12月、湖北省委員会が開催した黄安七里坪抗日青年訓練班に参加する。ここは新四軍七里坪留守処所在地でもあった。韋君宜はこのとき党との関係を回復し、名前を韋君宜に改めた⁽²⁴⁾。

1938年の初め、この七里坪党訓練班で韋君宜は、湖北省委員会組織部長の錢瑛と知り合った。訓練班が終了するとき、錢瑛は班にやってきて卒業後の分配をおこなった。党員学生については主に錢瑛が個別に話をした。韋君宜がこれまでに知っていた党の指導者は、

全て彼女の同学で、年齢経歴にほとんど差がなく、錢瑛のような地下党の古くからの指導幹部、真の職業革命家には会ったことがなかった。四方に風の通る民家——訓練班の本部にドキドキしながら呼ばれて行くと、やせた中年の女性が藍色木綿の旗袍を身に着けてポロポロの木製の机の前に座っていた。ごく平凡な家庭の主婦のようで、微笑みながら、韋君宜が官僚の娘でありながら革命に参加するために出て来られたのは素晴らしい、とほめてくれた。当時党内の幹部檔案制度をまったく知らなかった韋君宜は、錢瑛がどうして知っているのだろうと喜ぶとともに驚きいぶかった、と言う。その後、錢瑛はこの小さな根拠地（紅色山郷）に留まって宣伝工作をしたいかとたずねた。韋君宜は外の救亡運動の高まりにひかれていたので、外の世界で工作したいと希望した。彼女は話しやすく、韋君宜が党のことを聞かないと批判することは少しもなく、韋君宜の要求を考慮すると答え、最後に、党は今、各方面に幹部を必要としていると語った。錢瑛の第一印象は温和で親切で物静かというもので、学生運動の指導者は口を開けば滔々と絶えることなく談論風発したのに対し、錢瑛は謙虚で度量が大きく、実際に則して韋君宜が問題を解決するのを助けてくれたと言う⁽²⁵⁾。

韋君宜はその後武漢に戻って省委員会を訪ねたが、このとき錢瑛はおらず、中共湖北省委員会書記の郭述申（1904-1994、湖北孝感人）によって襄陽に派遣され、党の建設工作に従事することになった。しかし間もなく反動勢力に目をつけられたため、武漢に戻り、今度は錢瑛が韋君宜を宜昌に派遣し、党の建設に当たらせることにした。宜昌には韋君宜の叔父がおり、韋君宜の家があった。そのことを知っていた錢瑛は、武漢の「董代表公館」（董必武（1886-1975、湖北黄安人）の名義で借りていた家で、省委員会の機関）で韋君宜に「宜昌に派遣する。まず家に戻って待っていること。時が来たら、私があなたを訪ねていく」と簡単かつ明確に述べ、韋君宜を叔父の家に潜ませた⁽²⁶⁾。

韋君宜の2番目の叔父は宜昌に小さな洋館を建て、4番目の叔父夫婦が管理していた。韋君宜は姪の身分ゆえ、1人で、2間を与えられて暮らした。数日待つて焦っていると、ある日突然錢瑛がやってきた。母屋に入って韋君宜の4番目の叔母に礼儀正しく挨拶をしてから、韋君宜の暮らしている後ろの建物に来て座ると、すぐに「全ての手筈は整った。宜昌区工作委員会を設立する。あなたは区工作委員会組織委員を担当しなさい。この地方にはもともと党組織はなく数人が自発的に支部を設立してただけで、私はもう審査を終えた。今後は全てをあなた方にまかせる。あなた方新しい区工作委員は党組織を発展させればよい」と言った⁽²⁷⁾。

宜昌区委員会成立の会議は、韋君宜のこの客間兼書斎で開催された。ちょうど夏で、韋君宜は新しく作った白い紗の旗袍を着ていた。まるで客を招待するように家で彼らが1人

また1人やってくるのを待った。なんとこの新しい区委員会書記は同学孫世実だった。もともと党が彼に与えた任務は、武漢で湖北鄉村合作訓練班に応募し、農村へ行って仕事を始めるというもので、彼は合格し宜昌一帯に派遣されたが、数カ月余り経っても工作の目処が立たず、そこで党はようやく彼を宜昌に留めて、地下仕事をさせることに決定した。この会議には錢瑛も出席した。彼女は多くは語らず、今後の工作の分担と発展の方針についてのみ話した。その後、韋君宜の家は実質的に宜昌区委員会の機関となり、会議の開催、書類の保存はここで行われた。錢瑛ははっきり言わなかったが、彼女が韋君宜を宜昌に派遣したのは、韋君宜のこの社会関係を利用するためだと韋君宜にはわかっていたと言う⁽²⁸⁾。

韋君宜はこれまで党の組織工作をしたことはなく、それは他の2人の委員も同じで、いずれも北平天津から流れてきた同学であり、錢瑛はどうしてこんなにも彼らを信任したのだろうと思った。このことについては、何年も経ってから、当時湖北省各地区の地下党は10年の内戦ですべて破壊され、抗戦が始まって、彼女のような古参党员の一群が出獄してきたとき、最初の任務が再び党を建設することであり、彼女の手元には青年知識分子幹部しかいなかった、旧来の伝統を破って大胆に彼らを使い、彼らに依拠して工作するしかなかったということを知った、と韋君宜は述べている⁽²⁹⁾。

韋君宜は、「一段補白」の中で当時について以下のように回想している。

彼（孫世実）と宣伝委員は共同で1軒のボロ屋に住んだ。私の家からは3、4筋の胡同しか離れていなかった。彼らはすべて無職だった。私はそのボロ屋に数回行ったことがあるが、彼らの生活は本当にひどいものだった(25頁)。それは旧式の中国家屋で、建物に上がると床がガタガタと鳴り、全ての家具はいったい黄色なのか、それとも赤、黒なのかもわからなかった。ちゃんとした机もなく台所にある大きな板を渡したような机がひとつあっただけであった。しかし小孫が出かけるときはいつも清潔な白いシャツと紺のズボンを身につけ、頭髪も美しく整えられていた。彼は工作しやすくするために努力しているのだと思った。

彼らが住んでいる場所は本当にひどかったので、会議を開くときや彼と工作の相談をするとき、新党员の入党儀式等々は基本的にすべて私の家でおこなった。彼は私の家にしょっちゅう来る客となった。われわれはどちらもまだあんなにも若かったので、彼がしょっちゅう来るようになると、4番目の叔父夫婦は自然に彼が私のボーイフレンドだと思ふようになった。彼らがこのように推測するのはわれわれの活動にとって保護色となり、いくらか安全な感じとなった。

私の部屋は清潔な机とソファー、花瓶があり、壁には北平時期の古い写真がかけられ、李後主の亡国後の詞がそえられて、窓の外には一本の沈丁花があり、昔話をするのによい環境だった。しかしわれわれは確かに毎回会うたびに仕事の話ばかりしていた。これは自覚して抑制していたといえる。というのは当時われわれは人口数十万人の宜昌において真理を宣伝する任務を担っていたため、自分たちを一般の青年男女と同列には考えられなかった。

宜昌区委員会は規定により公安・石首・宜都などのいくつもの県を管轄下に置いていた。かつては党の活動をおこなったところもあったが、この時にはもう完全に無くなっていた。小孫は地方に出かけて奔走し開拓する任務を負っていた。数日おきに出かけた。市内には国民党の青年組織と青年雑誌があり、それらと闘争しなければならなかった。進歩を追求する小学校の教師は組織して指導しなければならず、宜昌に流浪してきた青年には落ち着き先を手配しなければならなかった。さらに中間人士を勝ち取らなければならなかった……。これらの全てが当時わずか20歳の小孫の肩にかかっていた（26頁）。

今思い出しても、20歳というのはまだほんの子供でしかないではないか？しかし当時私にはそのような感覚はまるでなかった。おそらく重い工作の負担が彼の早熟をうながしたのだろう。彼はこれらの複雑な問題について、口を開けば気楽に何かを話すことはまれで、長い間仔細に考えて、はっきりと考え抜いてから明確な意見を発表した。

彼は私の書斎で党员気節教育大綱を起草し、上級への報告も書いた。ときには彼が書いていると、私は彼のために紙を裁断した。彼のためにお茶を入れたときもあった。彼は私と一緒に支部や大衆団体にも行った。彼と一緒に宜都県に打ち合わせに行ったこともあった。私は裕福なお嬢様の身分で上流女性の活動や難民児童救済の活動に参加したが、この方面では彼よりも多く活動した。彼が参加した下層の秘密活動や青年の救亡活動は、私よりもずっと広範だった。私は彼の方が私よりもずっと成熟していると本当に思っていた。

そのとき宜昌は武漢から重慶に行く際に必ず通過しなければならない中継地点であった。当時清華大学はすでに北京・南開大学と連合して昆明に西南聯大を成立させていた。清華の同学には、宜昌を通る時私の家まで会いに来て、私になぜ学校に戻らないのか、こんな所で何をしているのかと聞く者もいた。私は家に用事があるとか、両親が私を香港経由でアメリカに留学させたがっているが、まだ予定が立たない……と口を濁すしかなかった。小孫の方はもっと同学に答えようがなく、救国活動をして

いるが、団体名はないと言うしかなかった。そのボロ屋は客人を接待するのに本当に不便で、彼は知人と出会わないように避けるしかなかった。大学に行くとか留学するとかについて、当時の私たちの頭の中には考える余地などまるでなかった。小孫の父や兄からも手紙が来たが、彼はかくれんぼうをするようにさまざまな嘘でたらめをでっちあげた（27頁）。

その後、同じ1938年の夏、韋君宜と孫世実は前後して武漢に異動した。その時、武漢の救亡運動の高まりはすでに過去のものとなっており、国民政府は民族解放先鋒隊、青年救国団（以下、青救団と略す）、蟻社など3つの進歩的団体に解散命令を出していた。韋君宜と孫世実の任務は、民族解放先鋒隊を復活させ、地下活動を行なうことであった。このとき韋君宜は裕福なお嬢様の身分を取り消し、富源里2号の省委員会の機関に住み、職業革命家となった。孫世実は華商街保和里の中国学連の機関に住んだ。2人の住居はどちらも朝早くから夜遅くまでドアが開けられ、止むことなく人が出入りして、工作について話し合っていた。集団の弁公室と応接室を兼ねていたため、プライバシーは全くなかった。このとき2人はすでに恋人同士の関係に進展していたが、恋人としての唯一の時間と場所は、会議の後、大通りを一緒に歩くとときしかなかった。韋君宜と孫世実は、夜は工場地区に潜入し、昼間は上層の団体や家庭に駆け付けた。民先隊のメンバーは広範だった。国民党では絶対に武漢を守るはずがないことを目の当たりにしていたから、武漢撤退後、民先隊員に鄂中で遊撃戦をさせるため組織の配置もした、と言う（28頁）。韋君宜は漢陽の工場に行って、民先隊員が遊撃戦の準備をするよう手筈を整えた⁽³⁰⁾。錢瑛は韋君宜をまた宜昌に派遣することをすでに決定していた⁽³¹⁾。韋君宜と孫世実は武漢撤退後、宜昌に着いてから結婚することを決めていた⁽³²⁾。

韋君宜は武漢にいても、黄鶴楼へ行って長江を見る時間もなかった。韋君宜と孫世実は道いっばいの月の光を一緒に踏みしめながら、将来きっと一緒に行こうと約束していた。韋君宜が、将来、革命勝利の後、文学をやりたいと言うと、孫世実は学問をしたい、経済学をやりたいと言った。革命勝利の後、一緒にやろう、一緒に書齋を探して……と語り合っていた（27頁）。韋君宜のいう「青年時代に理想に酔いしれていたあのもっとも楽しかった日々」のことである。家からは、宣伝だけでは救国できない、大学を卒業してからでも救国はできると、頻繁に手紙が届き、ついに本当に母が父の手紙を持って香港経由で武漢まで訪ねてきて、アメリカへの私費留学を勧められたのだが、韋君宜は聞き入れなかった⁽³³⁾。

しかし、この武漢撤退の際、孫世実が死亡してしまう。武漢陥落は10月25日、韋君宜

が武漢から撤退したのは10月20日。孫世実が犠牲になった経緯について、韋君宜は、錢瑛が宜昌に到着した翌朝、彼女の口から聞く。その前夜、新華日報駐宜弁事処で孫世実犠牲の悪報を聞いたのだった。錢瑛は泣いて何も話せない韋君宜を藤椅子に座らせ、韋君宜に牛乳を飲ませた。長い間、韋君宜の肩を軽く叩き、韋君宜が落ち着いてからはじめて詳細を話した。同じ船で難にあった多くの同志について、その光栄なる犠牲の状況についても話した。孫世実ひとりについて話したのではなかった⁽³⁴⁾。「新昇隆号」への爆撃で25人が死亡していた⁽³⁵⁾。韋君宜は、これが彼女ひとりだけの不幸ではないことを気付かせようとしたのだろう、それからずいぶん経ってから錢瑛の夫も革命の中で犠牲になったことを知ったと言う。錢瑛は韋君宜をここに残して秘密工作に当たらせず、直ちに延安に送ることを決定し、彼女に「延安に帰りなさい。延安は自分の家よ。きっと元気になるわ」と言った⁽³⁶⁾。

「八年行脚録」によれば、韋君宜は、あわただしく宜昌から民生会社の汽船に乗って重慶に向かった。重慶では成都行き車の切符が一カ月先にしか取れなかったため、2番目の叔父のところへ昆明に行くことと嘘をついて学費をもらい、成都まで飛行機で行った。成都では、後の夫で清華の同学、楊述（1913-1980、江蘇淮安人）の兄の家に泊まり、その兄の助けで旅行証明書とチケットなどを手に入れ、12月末に西安経由で根拠地延安に向けて出発。出発前にはパーマを当てて化粧をし、イヤリングや刺繍された靴を買い、若奥様の扮装をした。当時四川から陝西に行くのは学生にとって困難なことで、名前も変えた。西安弁事処に着くと、枕の綿の中から紹介状を出し、頭を散髪し、延安到着後は何の役にも立たないと考え、イヤリングや靴、絹の長衣などをすべて捨て、それから延安の冬に備えて15斤の重さの綿入れを買った。延安到着は、1939年1月2日だったと言う⁽³⁷⁾。

Ⅲ 抗戦初期の武漢と一二九戦士たち

抗戦初期の武漢と一二九戦士たちの状況について、主として中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』（中共中央党校出版社、1986年）、璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』（中共党史出版社、1991年）、蓋軍主編『中国共産党白区闘争史』（人民出版社、1996年）に依拠して、ここでまとめておこう。なお、「一二九戦士」とは、『一二九運動史要』の記述にならい⁽³⁸⁾、一二九運動に参加後、八路軍や新四軍、国民党統治区で抗日戦争を戦った学生のことをいう。

1937年11月、武漢は実質的に戦時首都となり、青年学生が全国各地から武漢に雲集した。抗戦が勃発すると、上海は全国の抗日救亡運動の中心となったが、北平・天津・上海・南

京が陥落して戦火が拡大すると、中国の軍事・政治・経済・文化の中心は武漢に移り、それとともに抗日救亡運動の中心も武漢に移ったのである。

中共中央北方局の劉少奇（1898-1969、湖南寧郷人）、彭真（1902-1997、山西曲沃人）らは、1937年5月に延安で開催された中国共産党全国代表会議と白区工作会議に参加した後、山西省太原に到着したところで、平津がすでに陥落したことに鑑みて、北方局は以下の決定をした——平津に留められない党員と中核分子は全て平津から撤退し、党の指導機関は太原に撤退する。平津を出た党員と幹部、積極分子は大部分が太原に行き、配属先が決まるまで待機しなければならない。太原に来られないものは直ちに冀東あるいは平津市外の農村に行き、方法を講じて銃を取って遊撃戦をやる。北方局は太原で引き続き党内刊行物の『火線』『闘争』を出版し、華北抗戦の各項の工作与闘争を指導する⁽³⁹⁾。

しかし盧溝橋事件が起きた時はちょうど夏期休暇中で、大部分の学生はすでに学校を離れ、多くの党員と民先隊員も自分の上級とすぐには連絡が取れなかった。このとき民先隊本部は隊員に太原に向かうよう、できる限り通知したが、動乱の中で、通知を受け取らなかった中核分子も多くいた。彼らは南下して党と連絡を取るしかなかった。『一二九運動史要』によれば、「大量の一二九戦士は太原に到着した」、「また、別の一部の平津流亡学生は南方の国民党統治区に到着してから、ここで多くの中核幹部の学生は共産党と連絡が取れるようになり、延安およびその他の抗日根拠地に駆け付けた。その他に多くの者が、当地の愛国的進歩学生とともに抗日救亡運動を展開した」と言う⁽⁴⁰⁾（傍点は楠原、以下同じ）。しかし韋君宜は、「抗戦が勃発すると、皆は南方へ赴いた」「われわれの大部分は北平を離れ武漢に行った」と記している⁽⁴¹⁾。

平津の愛国学生らは、南方各地に到着すると流亡同学会を設立した。そのうち最も重要なものは1937年8月から10月まで活動を展開した南京平津同学会と、1937年9月以降活動を展開した武漢華北同学会だった。清華大学党支部書記で湖北省出身の楊学誠〔191?-1944、湖北黄陂人〕は南京から武漢に戻ると、8月には武漢の平津同学会（後に華北同学会に改める）を設立し、武漢秘密学連と民先隊の責任者、何彬（何功偉、1915-1941、湖北咸寧人）、郭佩珊（1912-1985、河北定県人）らと連絡をとった。于光遠（1915-、上海人）、蔣南翔、黄華（1913-2010、河北磁県人）らも次々に武漢に到着した。中共中央長江局は彼らを指定して、長江局青年運動委員会に参加させた。後に延安から派遣された宋一平（1917-2005、湖北石首人）が中共中央長江局青委書記となった。

抗戦前の10年内戦の間、国民党の残酷な弾圧と数次の極「左」冒険主義がつくりだした悪い要因により、揚子江流域と南方各省の共産党組織はいたるところで破壊されていた。14の遊撃根拠地で党の勢力をいくらか保存できたほかには、全国国民党支配地域において

北方局所属の組織と上海、西安などで保持された一部の組織が残ったのをのぞき、それ以外はすべて破壊しつくされ、党と組織的に繋がりのある党員はきわめて少数になっていた⁽⁴²⁾。

1937年12月、中共中央は政治局会議で武漢に中共中央長江局を設立し、「南中国における党の工作を統轄する」ことを決定した。長江局設立後の第一の任務は、南方各省に党組織をすみやかに再建・設置し、南方地区における党の指導を強化することであった。長江局には組織部、民運部（大衆の抗日救亡運動を指導する）、参謀処（軍事工作）、党報委員会（『新華日報』の工作と抗日宣伝工作进行を指導）と秘書処が設置された。その後、職工運動委員会、青年運動委員会、婦女運動委員会を設置し、大衆抗日救亡運動に責任を負った。

中共はそれより前の1937年9月、董必武を中共中央代表の資格で武漢に派遣した。中共の湖北省の組織は、董必武の指導下で再建された。抗戦勃発の前、中共中央北方局と上海党組は、武漢における一二九運動の積極分子を党員として加入させ、党支部を設置するとともに、1936年秋、北方局の指導下に中共武漢臨時工作委員会を成立させていた。抗戦が勃発すると、中共の白区工作会議に参加した後、華北からの流亡学生について武漢に到着した楊学成をリーダーとする中共武漢地方工作委員会を設置。9月、八路軍駐武漢弁事処が成立し、武漢地区の党組織を再編した。10月、中共中央は郭述申を武漢に派遣し、郭述申、陶鑄（1908-1969、湖南祈陽人）、錢瑛を成員とする中共湖北省工作委員会を設置、郭述申は書記に就任した。省工作委員会は武漢地方工作委員会を基礎とし、もとの組織を再編して、新党員を増やした。1937年12月25日、中共湖北省工作委員会は中共湖北省臨時委員会に改められ、1938年1月13日、正式に省委員会が成立した⁽⁴³⁾。郭述申が書記、委員は錢瑛、何偉（1910-1973、河南汝陽人）、楊学誠、陶鑄など。

湖北省委員会は武漢「八弁」（八路軍駐武漢弁事処）、新四軍弁事処などの合法的な機関の名義で全省各地に人を派遣して、党の工作进行を展開し、全省各地の党組織を迅速に発展させた。湖北省の党員は1937年10月の20余人から、1938年8月にはすでに3300余人まで増加していた⁽⁴⁴⁾。1938年10月には中共湖北省委員会は、4つの特別委員会と1つの中心県委員会、3つの中心県委員会級の工作委員会を統括し、あわせて40の県級党組織を管轄下に置き、全省の党員は計5000余人となった⁽⁴⁵⁾。

当時、多くの一二九運動の中核的幹部、蔣南翔、李昌（1914-2010、湖南永順人）、楊学誠、黄華、于光遠らはいずれも武漢地区で青年工作に従事し、武漢地区の青年抗日救亡運動は目覚ましい勢いで発展した。1937年9月、中華民族解放先鋒隊は武漢に弁事処を設立し、新隊員を受け入れた。一二九運動2周年を記念する大会で、北平からやって来た一二九戦士と地元武漢の一二九戦士たちは、先進的な青年大衆組織——青年救国団の設立

と、全国学連代表大会の計画準備を提案した⁽⁴⁶⁾。

『中国共産党白区闘争史』によれば、1937年12月末、中共の指導下で一部の進歩的な青年はさらに当地に、当時影響力の最大であった青年組織——青年救国団を設立した。その後の7-8カ月間で2万余の団員を擁する団体となり、その組織は武漢三鎮の各種業種のみならず、武漢周辺の広範な都市と農村、および湖北省以外の都市と町にまで拡大した。これは「民先」とあわせて「全国青年の2つの明珠」と称された⁽⁴⁷⁾。

1938年2月には、董必武の配慮のもとで、統一戦線団体の中国青年救亡協会が設立された。同月、中華民族解放先鋒隊の本部は、臨汾から西安を経て武漢に移転してきた⁽⁴⁸⁾。1938年3月25日から27日まで、長江局青年委員会は全国学連第2次代表大会を開催し、各地の学連の73単位から123人の代表が参加した⁽⁴⁹⁾。大会では今後の学生救亡運動の方針について討論し、国共両党と国民政府の責任者が出席した。この大会は「一二九運動以後、最初で最大の学生救国代表会」と称賛された。学連内部には、蔣南翔、鄭代鞏(1915-1943、貴州正安人)、陳柱天(1910-1938、湖北漢陽人)の3人からなる学連党団が置かれた。

武漢には八路軍武漢弁事処と『新華日報』社が設置され、中共湖北省委員会が再建され、大衆を動員するのに、学生がつねに主導的役割を果たすということはなくなった。一二九戦士の多くはすでに党の中核的幹部となっていた。全国学連、青救団、民先隊のほかにも、各種青年救亡団体が続々と武漢に到着し、また武漢で結成され、次々に活動が展開された。

戦争のために党との連絡を取れない多くの党員と民先隊員が武漢に駆け付け、平津流亡同学会、民先隊本部弁事処、八路軍弁事処を訪ねた。学生らはここで紹介状を受け取り、延安を経て華北の前線あるいは新四軍に赴いた。陝北公学と抗大はいずれも武漢で公開して学生を募集した。各団体の床いっぱい、延安に行こうとする人々が寝泊まりしていた⁽⁵⁰⁾。

抗日救亡運動の中心が武漢に移って以後、1938年5月の統計によれば、武漢だけで40種余の刊行物が出版され、そのうち38種が中共の指導あるいは影響下にあった。新聞雑誌の中で指導的な役割と大きな影響力を持ったのが『新華日報』(中共の機関紙)と『群衆』週刊(中共の機関誌)であった。『新華日報』は中共が国民党統治区で合法的に発行した最初の大型新聞で、1938年1月11日に創刊、発行部数は、2月に2万部余、4、5月には5万部余に達し、「中国の新聞の中で最大の販売部数」となった⁽⁵¹⁾。

しかし、1938年6月16日、蒋介石を名誉団長とする「三民主義青年団」が成立すると、中共の影響下にある民先隊、青年救国団などの組織と対抗し、進歩団体の集会和活動を制限し始める。国民政府はまず、1938年7月、西安の西北青年救国会など13の救亡団体を解散し、民先隊西北隊長、西安隊長ら5人を逮捕した。武漢陥落の約2カ月前の8月13日

には中華民族解放先鋒隊、青年救国団、蟻社の3つの影響の最も大きい団体に解散命令を出した。同日、貴州省国民党本部は合法的な地位を得るために登記に来た80余人の民先隊員を逮捕した。そしてこれ以後、進歩活動は再び地下に潜ることになった⁽⁵²⁾。

武漢陥落後、国民政府の主要機関は四川省重慶に移った。1938年9月に開催された中共拡大6期6中全会で、戦局の変化により、長江局を廃止し、南方局、中原局と東南局を設置することが決定された。南方局は中共中央を代表し、南方の国民党統治区と一部の淪陷区における党の工作を指導した。南方局の機関は重慶に設置された。武漢が陥落したのは1938年10月25日であり、長江局副書記・中共中央代表団の責任者であった周恩来（1898-1976、原籍浙江紹興）らはその日の早朝、最後に武漢から撤退し、長江局の工作は終了した。

「歴史的事実」をそのまま整理すれば、以上のようになるが、例えば、1937年に学生は北平からどこに行くかについても、当時において意見の対立があったばかりでなく、1985年に『一二九運動史要』を編集する過程で、それをどう記述するのかについても議論があった⁽⁵³⁾。奥付によれば1986年2月に中共中央党校出版社から発行された『一二九運動史要』を執筆編集した中共中央党校党史研究班は、1983年中央書記処の批准を経て、一二九運動の簡要の歴史を執筆編集することを任務として設立された。この『一二九運動史要』編写組は、当時、中共中央党校第一副校長であった蔣南翔が主宰、韋君宜も主要な編集者として参加し、2年半におよぶ編集工作に携わった。1985年一二九運動50周年に出版する計画であったが遅れた。蔣南翔は、本来自分の体験にもとづき、できる限り校正と訂正、原稿の補足をおこなう予定であったが、1984年中央党校で、心臓病で倒れ、それ以後死ぬまでの4年間、何度も入退院を繰り返し、ほとんど病院ですごし、彼が直接執筆工作に参加することはなかった⁽⁵⁴⁾。

韋君宜はこの問題、1937年に学生は北平からどこに行くかについて、次のように記している——当時北方局指導者の劉少奇は、すべての学生、特に中核的幹部の学生は華北に留まり抗日すべし、太原に集中し、南方に行ってはならない、と主張した。蔣南翔は一貫して劉少奇には敬服していたが、このときは観点の違いから自分の意見を明確に示した。彼は、大勢の学生が北方に留まり抗戦するのはもちろん重要なことであるが、絶対化してはならない、と考えた。多くの学生は南方出身で、彼らは当然南方に帰ってもよい。何をするかについては指導しなければならないが、革命学生が北方に行って抗戦しようとするれば、両親が呼びに来る。やはりまず南方に帰って、そこからまた来ればよい。さらに、当時、南方の都市の地下党はひどく破壊されていたため、党組織も学生の中核的幹部が南方に戻って、工作に従事することを必要としていた。その結果、蔣南翔は批判を受け、南方

から太原に異動し、小型新聞の編集工作にまわされた⁽⁵⁵⁾。

さらに蔣南翔は、1938年3月、武漢で全国学連第2次代表大会が開かれたとき、南方に仕切れる人材がいないと考えて、また駆け付けたのだった。当時、劉少奇は南方の党組織に手紙を出し、蔣南翔が南方に勝手に戻ったことを批判し、学生を連れて行ったことは間違っている、と言った。このことについて、韋君宜は、「解放後、除雲^ヲ⁽⁵⁶⁾同志が調停して、双方に間違いは無かったとされた。北方でも人材は必要だったし、南方でも人材は必要だった」と記している⁽⁵⁷⁾。

当時、中共北平臨時市委学連党団書記であった彭濤（1913-1961、江西鄱陽人）は、1960年に書いた回想文の中で、「党は単一の指示を出し、学生は農村へ行って遊撃隊に参加した。冀中・晋察冀へ行った者が多く、太行山へ行った者は少なかった。流亡学生の大多数は延安へ行った。当時は組織的に撤退し、「民先」の名義を公開で用いて、大勢で移動した。一部の者が北平付近の根拠地に配属され、少数の者が都市に留まり工作した」と記すのみで、武漢については触れていない⁽⁵⁸⁾。この文章は、1987年6月に中共党史資料出版社から出版された中共北京市委党史資料徴集委員会編『一二九運動』に収録されているが、同じく本書に収録された回想文の中で、当時、全国民先隊総隊長であった李昌は、天津で蔣南翔らと指導幹部会議を開き、撤退方針について討論した際、「会議では2つの異なった意見が出た。1つは「北上する」、華北に留まって農民と一緒に遊撃戦をおこなう、もう1つは「南下する」、大衆を立ち上がらせて、国民党政府の抗日を推進するというもの。討論の結果、北上するのは重要なことであるが、南下するのも必要である、ということになった」と記している⁽⁵⁹⁾。

韋君宜自身は、次のように述べている——北方でも南方でも人材が必要であった。当時大勢の学生は革命したかったが、どこへ行けばよいのか、本当にわからなかった。自然に抗戦の中心地武漢に押し寄せたのは、戦争から逃避しようとしたのではなかった。私自身も武漢に行って、ようやく党組織と連絡が取れた。少なからぬ人が私と同じだった。多くの人が党との組織的な繋がりを捜しあて、延安に行った。多くの北方から来た党员が、ここで党の建設工作に参加し、多くの県委員会を再建した。歴史的にみれば、武漢は若い学生たちの革命の集散地として、役割を果たした。私は蔣南翔の当時の工作は意義があったと考える⁽⁶⁰⁾。

韋君宜によれば、それから50年近くが経過した1985年、『一二九運動史要』を執筆する際、一部の同志が、「かつて毛沢東の言葉に疑問を持つことが許されなかったのと同じように、劉少奇同志の述べたすべてのことは正しく、疑問の余地はない」と、あくまでも主張した。「蔣南翔の主張と行為は誤った路線の代表である。劉少奇同志のこの手紙を公開

しなければならない」と言うのである。このことについてその他の執筆者は気をもみ、そんなことをしないようにと願った。この問題について、蔣南翔は「劉少奇同志は、私が彼に反対したとは言ったことがない……」、「歴史とはいったいどういうものなのかを見なければならぬ」と語った。そして歴史に結論を出すために、病中にありながら蔣南翔は、韋君宜と黄秋耘の2人の主要執筆者と相談し、2つの主張とやり方と効果を事実に従って叙述し、結論を出さないことにした⁽⁶¹⁾、と言う。『一二九運動史要』には以下のように記されている——一二九戦士は、八路軍、新四軍に赴いた者以外に、国民党統治区における工作でもかなり大きな成果を上げた。北方に向かった者であれ、南方に行った者であれ、一二九戦士は、最後には抗戦の烈火の中に身を投じ、自らの青春を捧げ、最後の一滴の血まで流しつくした者もいた。彼らはすべて人民にも時代にも恥じるころはなかった⁽⁶²⁾。

映画のシナリオ作家の黄宗江（1920–2010、浙江瑞安人）は、かつて一二九運動を題材としてシナリオを書こうとして、韋君宜にインタビューをおこなったが、このテーマも禁忌が多く、断念したと言う⁽⁶³⁾。西安事件勃発後ただちに国共合作が成ったのではなかったし、抗戦勃発後の情勢認識の差異もあり、意見の対立もあったのである。

楊尚昆（1907–1998、四川潼南人）によれば、それは1937年10月8日に華北軍分会が出した小冊子『対目前華北戦争形勢与我軍任務的指示』（任弼時が起草）にも反映されている。当時、劉少奇は、華北の陥落は不可避ゆえ、国民党軍の抗戦を積極的に援助するよりも、この機をとらえて遊撃戦を展開し、民衆を取り込んだ上での新政権樹立をはかるべし、統一戦線にこだわって活動を萎縮させてはならない、と考えていた。それに対し、周恩来は統一戦線を考慮に入れなければならないと考え、任弼時（1904–1950、湖南湘陰人）は劉少奇を「民族失敗主義」だと言って、小冊子に「民族失敗主義の考えと華北の戦局は挽回できないという宿命論に反対すべし」⁽⁶⁴⁾と書いた。劉少奇の見解に近かった毛沢東は、この小冊子を見て激怒し、10月17日に「軍分会の10月8日の指示は原則上の誤りあり、伝達を停止されたし」と打電したこともあった⁽⁶⁵⁾。

IV 一二九戦士たちのその後

『一二九運動史要』の奥付には1986年2月発行とあるが、蔣南翔が書いた本書「後書」には1986年11月とあることから、実際に発行されたのは11月以降のことであろう⁽⁶⁶⁾。「後書」によれば、韋君宜と黄秋耘が、全文の文字を統一し、決定稿作成の責任を負った。韋君宜は決定稿作成の過程で、病気で倒れたため、黄秋耘がこの仕事を引き継いで完成させた。

韋君宜は、『一二九運動史要』編写組で工作していた1986年4月、脳溢血で死にかけたのだった。一時は口もきけず、手も伸ばせず、足も上げられず、ほとんどすべての活動能力を失った。病院に入院中の蔣南翔はそのことを聞いたとたん涙を流して、「私が小魏（韋君宜）をこんなにしてしまった」と繰り返し、彼の夫人を何度も韋君宜の見舞いに来させた⁽⁶⁷⁾。

韋君宜が『一二九運動史要』編写組に参加し、主要な編集者として2年半におよぶ編集工作を開始したのは1983年のことである。韋君宜はこの年の10月には人民文学出版社社長に就任。社長としての激務に追われる一方で、作家としても執筆に励み、1985年1月には札記『老編集手記』を四川人民出版社から出版、8月、散文集『故国情』を天津の百花文芸出版社から、12月、長編小説『母与子』を上海文芸出版社から出版している。年末に退職すると同時に、人民文学出版社編審委員会委員、專家委員会委員、雑誌『当代』顧問などに就任。1986年、『一二九運動史要』の編集は最終段階に入ったところ、4月21日、作家協会の座談会の席で突然脳溢血の発作を起こして倒れたのだった。協和医院で一命を取り留めるが、半身不随となり、病床で字を書く練習を始める。秋、退院後、民営のリハビリ施設に入院、病状がやや好転し、執筆を再開する。

韋君宜は、「蔣南翔は病床で『一二九運動史要』の出版後記を書いた。……この本を編集し、昔の同学たちを追想することは、彼の最後の願いだった。娘を病院まで彼の見舞いにやると、彼は同学の韋毓梅（文革前、上海市教育局長、文革中、凌辱に堪えかね、ビルから投身自殺）の子供の行方をたずね、娘に何とか調べてほしいと頼んだ」と言う⁽⁶⁸⁾。

蔣南翔は心臓病に加えて、1988年の年初以来、消化器系の癌で病状が悪化した。その知らせを聞いて、韋君宜は3月ごろ彼を最後に見舞う。このとき彼はベッドに横たわり、動くことも食べることもできず、人參の薬湯をほんの少し飲んで命をつないでいた。目を開く力もなかった。韋君宜が来たことを知らされると、彼は必死に目を開き、やっこのことで「われわれの『一二九運動史要』をようやく出せたね」と言い、それから「韋毓梅や孫世実らを記念する文章は書いたのか」とたずねた⁽⁶⁹⁾。韋君宜は、「蔣南翔が自分の死期を悟り、私に別れを告げたとき、再三「韋毓梅の追悼文を書いたか」と問い詰めた。死の直前、彼はまだこんなにも彼女のことを気にかけていた」とも記している⁽⁷⁰⁾。そこで韋君宜は、何か言うべきことを忘れていないかと仔細に考え、こうして韋君宜は、韋毓梅の死が公表された後、書いた追悼文「憶孫蘭——為紀念一二九運動而作」(1980年)に加えて、「她死得好慘——哭韋毓梅」(1992年)を書いた。

韋毓梅については、後で述べる。ここでは、韋君宜が蔣南翔の死に際して、特に2つのことについて述べていることに注目したい。1つは、蔣南翔は死に臨んで、最後まで忘れ

られなかったのが韋毓梅であったということであり、もう1つは1945年に書いた搶救運動に関する意見書を発表するよう求めたことである。韋君宜は蔣南翔の死後にはじめてこの意見書を見ることができた、さらにその後、彼が危篤の床で、この意見書を発表するよう求めたこと、それと同時に、別れを告げに来た人に、「共産主義を堅持せよ」と言って聞かせたことを知った、と記している⁽⁷¹⁾。

この意見書は「關於搶救運動的意見書」で、蔣南翔の死後、『中共党史研究』1988年第4期に掲載された。同誌には、この意見書が、1945年3月、蔣南翔が劉少奇と党中央にあてて書いた報告であることと、紙幅の関係で、蔣南翔の生前に同意を得て、一部を削除したことが註記されている。

搶救運動とはどのようなものであったのか。韋君宜は次のように記している。

1942年、延安で、毛沢東同志が学風・党风・文風の整頓を言いだし、われわれ外来の知識青年は熱烈に呼応し、みずからの思想の中に何か不純なところがあるか懸命に反省した。つづいて整風から幹部審査に発展し、それがまた一変して搶救運動になり、幹部の中に国民党が派遣してきた特務が大量に存在する、と言う。彼らは「足を踏み外した」ので「足を踏み外した者を救出（搶救）しなければならない」のである。そこで辺区全体で運動がおこり、みなにいい加減に誰が特務か摘発するよう要求した。他の土地から延安におもむいた大多数の青年は、党のために生命の危険を冒した人ままで特務とされた。楊述も救出されて「特務」となった⁽⁷²⁾。

この時には、一二九運動まで国民党の紅旗政策である、と言われたのだった。一二九戦士で、抗戦期に全国学連主席・中共南方局青委委員であった鄭代鞏も、搶救運動で自殺した⁽⁷³⁾。

韋君宜によれば、当時、青年委員会書記の蔣南翔は、最初からこの運動には反対で、公開の席で賛成しないと発言しても、誰からも相手にされなかった。1943年、幹部審査が終わったとき、康生はまだ、運動は大いに成果を上げ、欠点はわずかであると言った。この時、蔣南翔は中央に上書して、運動によって幹部審査をするのは誤りであり、搶救運動は成果を主とするというのも誤りである、労働者・農民幹部のみを必要とし、知識分子幹部を差別するのはさらに誤りであるということを、はっきりと自己批判しなければならぬと述べた。意見書は直接劉少奇に手渡され、中央に送られたが、受理されなかったばかりか、このために彼は党内で批判を受け、重大な誤りを犯したと非難された。意見書はこれ以後日の目を見ず、彼自身は東北に配属され、ある省の下で宣伝工作をおこなった。そ

のまま青年団設立の時になって、ようやく戻ってきた。この処分の決定は、文革が終結した後の1985年、中央組織部が蔣南翔の徹底的な名誉回復をおこなった時まで取り消されなかった⁽⁷⁴⁾。

韋君宜は、蔣南翔が40年以上前に書いて中共中央に提出した抢救運動に関する意見書を読んで、蔣南翔の勇敢さとその透徹した眼光の鋭さに感嘆するとともに、当時の党中央がこの若者の意見を重視し聞き入れていたならば、「その後の、全国の知識分子と人民大衆を傷つけた、恐ろしい、どれほどの運動を避けることができただろう。解放後の中国はもう少し安定していたかもしれない。だがそうはならなかった」と述べている⁽⁷⁵⁾。

蔣南翔が死に臨んで、最後まで忘れられなかったという韋毓梅について、韋君宜は、「われわれが前に向かって進む道を切り開き」、「私を導いてくれた人」と言うだけではなく、1992年には「文革中、彼女は誰よりも苦しい目にあった」とも記している⁽⁷⁶⁾。

韋君宜は、北京市委員会宣伝部長であった夫の楊述について、文革時、「三家村」グループだと名指しされると、ただちに「三家村」のやり手として新聞に掲載され、全国的に名指しで批判され、被った残酷な苦痛と精神的な圧迫は「石に無理やり話をさせる」くらいにあり得ないほどのものだったと述べる一方で、「10年の大きな災難の中で苦しい思いをし、殴られ、吊るし上げられたが、これは皆に共通の経験であった。また彼の経験は比べてみれば、もっとも苦しいものであったということもできない」とも述べている⁽⁷⁷⁾。

あり得ないほどの残酷な苦痛と精神的な圧迫を被っても、それは皆に共通の経験であり、もっとも苦しいものと言うことはできないと言う韋君宜が、「誰よりも苦しい目にあった」と言うのは、どのような状況を指すのであろうか。

韋君宜によれば、抗戦開始後、大部分の人は北平を離れ武漢に行ったが、韋毓梅は工作のために長期間上海に留まり、武漢に来ることはなかった。その後新四軍支配下の根拠地に行き、地方工作をおこない、県長となり、孫蘭と改名した。このとき30歳を過ぎていたがまだ独身。彼女には同じ理想を持つ意中の人が清華にいたが、南北に離れ離れとなり、手紙のやり取りをするすべもなかった。彼女はずっと独身であったが、全国解放の後、ようやく長年会えなかったボーイフレンドに会い、結婚のお祝いを言った後、間もなく彼女も結婚した。解放後は江蘇省で教育庁副庁長、その後上海市教育局副局長となった。夫とはうまくゆかず離婚し、独り身となって、3人の子供と年老いたお手伝いさんとともに暮らした⁽⁷⁸⁾。

韋君宜が武漢に行き、長年会っていなかった韋毓梅に、1957年、韋君宜は北京のある会場で偶然出会った。彼女はゆっくり話したいと言ったが、当時韋君宜は「右傾の誤りを犯した」と批判されている最中で、彼女はこんな文芸界にいないのだから、幸福な

のだろうと思い、自分のことが落ち着いてからにしようと、彼女を訪ねなかった。韋君宜は、それが生涯の悔いである、と言う。彼女は文芸界にはいなかったが、同じように不運な目にあってきた。韋君宜はそのことを知らなかった⁽⁷⁹⁾。

韋毓梅は文革初期に死んでいた。そのことは、解放されてから⁽⁸⁰⁾、人づてに初めて聞いた。韋毓梅はビルから投身自殺、目撃者は筋向いのビルに住んでいた老同学の妹、王琴。韋毓梅の死後、子供は信義に厚いお手伝いさんが面倒を見た。目撃者の王琴はその後唐山に行き、そこで地震にあって死亡したため、韋君宜は詳しい話を聞けなかった⁽⁸¹⁾。

韋毓梅の死について、韋君宜は1980年の「憶孫蘭——為紀念一二九運動而作」の中で、次のように記している——1979年彼女の名誉回復の追悼会が開かれた直後、上海に行った。旅館に彼女の子供を訪ねるが、立ち去った後だった。上海で彼女をよく知っている人に出会い、窓越しに指さして、教えられた。阿平（当時清華の女子学生はこう呼んでいた）は付近のあのビルの9階から身を投げた。彼女の血痕は水で簡単に洗い流せなかったので、一時的にセメントを塗って、今もそのままになっている、と。私はひとりでそのビルの下へ見に行ったが、彼女の血がどこにあるのか見つけられなかった。にぎやかに多くの着飾った男女が私とすれ違ってゆくが、私が何を探しているかは知らない⁽⁸²⁾。

また、1992年の「她死得好慘——哭韋毓梅」では、「文革中、彼女は誰よりも苦しい目にあった」と書いた後、新四軍で彼女と知り合った女性作家、菡子（1921-2003、江蘇溧陽人）が教えてくれた、韋毓梅の友人の王琴がその眼で見たこととして、次のように記している——彼女は、闘争にかけられ殴られた後、家もないうえ、彼女を慰め、援助の手を差し伸べられる人もいなかった。造反派は彼女を殴り、身体中傷だらけにして、彼女を辱め罵るスローガンを身体に貼りつけ、動けなくなると、空き部屋に放り込んだ。彼女はひとりで横たわっていた。年老いたお手伝いさんも追い払われ、子供を呼んでも返事はなく、彼女はなんとか起き上がってバルコニーによじ登り、そこから飛び降りた。落ちるとき、腕と脚は大通りの電柱に引っ掛かって千切れた。彼女はこのようにして死んだ。死んだ場所は上海の繁華街だった。

さらに韋君宜は、上海に行ったが「追悼会には間に合わなかった。彼女の死後、人々がどう言っているか聞いてみたが、だいたいはこの女性教育者はとてもよく工作し、冤罪のまま死んだというもので、学生時代に彼女が清華で人々にあんなにも深い、尋常ではない印象を与えたことについて知っている人はほとんどいないようだった。彼女は特別な貢献をしたわけではなかったが、彼女個人のものである一生の幸福まですべて捧げたのである。蔣南翔は死に臨んで忘れられなかったのが彼女だった」と記している。

これが、全校の、また一二九運動のリーダーで、清華の共青団支部書記であった韋毓梅

の、韋君宜が「われわれが前に向かって進む道を切り開き」、「私を導いてくれた人」と言う韋毓梅の最期であった。

『一二九運動史要』の最終章である第12章「鮮花掩蓋着志士の鮮血」⁽⁸³⁾には、抗日戦争中、犠牲になった一二九戦士58人の名簿と、そのうちの20人の略歴が収録されている⁽⁸⁴⁾。20人しか紹介できなかったのは資料不足のためであり、名簿もごく一部にすぎないと言う⁽⁸⁵⁾。孫世実は略歴も掲載されているが、王文彬（1912-1939、江蘇豊県人）は名簿にのみ収録され、略歴は記されていない。

韋君宜は、この王文彬について、『思痛録』第14章「編輯的懺悔」の中で、次のように記している。

もう1人、北平の一二九運動で有名な、北京市学連常務委員の王文彬は、1938年には武漢で全国学連大会開催準備の責任者だった⁽⁸⁶⁾。大会が終わった後、指導機関は武漢で工作するようにと彼を引き留めたが、彼はなんとしても山東省の微山湖に帰り武器を取って抗戦すると言い張った。

「われわれは国民党を嫌というほど手伝った、私は帰ってわれわれ自身の部隊を率いてやるんだ。」

このような人が、微山湖の「湖西肅反（反革命分子肅清）運動」（康生が指導したと聞いた）で「反革命」とされ、銃殺に処せられた！彼が学生運動の名士だったせいか、ニュースが伝わり始めたとき誰もわれわれに真相を教えてくれず、ただ抗日で「犠牲になった」としか聞かなかった。だから楊述は彼を追悼する詩にこう書いた。

我聞君就義　　我は聞く 君義に就けるを
矢志与君同　　矢って志す 君と同じうせんと

（私は君が正義のために死んだと聞き／君と同じ道を進もうと誓いを立てた）

後になって初めてこんな死に方だったことを知った。このことを知っていれば、「君と同じ」とは決して書くはずがなかった⁽⁸⁷⁾。

王文彬がこんな死に方をしたから、「鮮花掩蓋着志士の鮮血」の名簿にのみ収録され、略歴は記されなかったのかもしれない。

韋君宜は、『思痛録』第14章「編輯的懺悔」の同じ頁で、王文彬の前に、熊大縝（1913-1939、江西南昌人）についても、以下のように記している——私より3学年上だった同学、熊大縝のことを憶えている。彼は平素あまり活動的ではなく、よく勉強していたのだが、抗戦が始まると、この本の虫は外国留学の機会を捨て、大学の助教にもならず、冀中へ行って

革命に参加した。彼は工科出身だったので、部隊では科学研究工作の責任者となり、爆薬や手榴弾を製造したり、北平へ薬品や通信機の買い付けに行ったりした。この人が後になんと特務の罪で銃殺されることになるとは誰が予想しただろう。しかもその判決は正式に通達され、法律に照らして極刑に処せられた。それを知って、同学はみな驚いて、互いに戒めあい、彼のことを「隠れていた悪人」として話題にした。あにはからんや、数十年後に再調査した結果、まったくの冤罪だった！

熊大績は、一二九戦士ではなかったが、みずからの前途をなげうち抗日戦争を戦った戦士であった。ところが同学にも冤罪であることを知られることなく、1939年にわずか26歳にして特務の罪で処刑され、名誉が回復されたのは1986年だったのである⁽⁸⁸⁾。

熊大績と王文彬は、どちらも冤罪だったにもかかわらず、文革のときには、彼らと同じ身分で、罪状まで同じ知識分子の悪人が小説の中で描かれた。韋君宜は、「これはなんと憎むべきでっち上げ、恥知らずな濡れ衣だったことか！それでも「文学」だといえるのか？」と憤るが、1973年3月、幹部学校から人民文学出版社に戻った韋君宜は、指導小組成員となり、そのような集団創作の小説の作成に加わり、本を書いたことのない人を手助けして、「指導者が必要とする本をでっち上げ」、出版しなければならなかった。『思痛録』第14章「編輯的懺悔」の中で、韋君宜は、編集者として、こんな嘘の話を捏造し、同学、友人、同志に無実の罪を着せ、作者のでたらめを手助けすることが自分の「任務」なのだったと、みずから恥じ、懺悔している⁽⁸⁹⁾。文革では韋君宜も迫害されたが、その一方で懺悔しなければならないこともしてしまったのである。

韋君宜は、「憶孫蘭——為紀念一二九運動而作」の最初の段落で、間もなく一二九運動45周年を迎えるが、まず多くの亡くなった人たちの面影が思い浮かぶと述べ、次のようにつづけている——人の運命とはどれほどおかしなものであることか。40年を振り返ってみれば、誰が英雄で、誰が囚人となるかは、早く死んだか、遅く死んだかによってすべて決定されるようだ。このような「運命」はどれほど恐ろしいことか。阿平があんな死に方をすると、革命成功の後に罪人となって死ぬとは、45年あるいは40年前に、私は絶対に夢にも思わなかった⁽⁹⁰⁾。

そしてこの文章の最後の段落は以下のとおりである——私を導いてくれた人、私の老同学！私はあなたの名誉回復の結論を聞かなかったが、そんな必要はない。あなたが無罪であるということを知っているから。あなたを造反した人たちはあなたを理解していないが、私はあなたを理解している。……あなたは私をこの道に導いてくれたが、あなた自身はその途上で見るも無残な最期を遂げた。一二九運動を思うと、真っ先にあなたのことを思い出す。あなたの最期は当時の大いなる志とまったく結びつかない。しかしあなたもまた八

路軍の前線で犠牲になった同学と同じように血を流した。彼らの血は1949年の新中国と引き換えにされたが、あなたの血はわれわれ老人の涸れかけた涙に換えられた。私はさらに別のものに換えられることを願っている。他でもなく人々の心を動かし、少し考えてもらいたいのである。若者たちの頑なな心を動かせるか、考えてもらえるかどうかはわからないけれども⁽⁹¹⁾。

韋君宜は、英雄になるか、囚人となるかは、早く死んだか、遅く死んだかによってすべて決定されるようだが、必ずしもそうとは言えない。韋君宜の同学、友人、同志が文革期に死んだのなら、すべて囚人・罪人として死ぬことになったであろうが、たとえば熊大績と王文彬は、孫世実死亡の1年後の1939年に、特務としてあるいは反革命として処刑されていた。彼らがそんな死に方をしたことについても、韋君宜は韋毓梅の場合と同じように45年あるいは40年前には絶対に夢にも思わなかったことであろう。彼らの無念の死について、孫世実のように、「いささかの疑念を抱くこともなく、新中国のために死んだ」とは言えない筈である。

その後、延安では搶救運動があり、新中国成立後も階級と党を至上とする大規模な思想改造と際限のない運動が繰り返されてきた。反右派闘争で右派分子とされ、1979年に名誉回復された国務院監察部常務副部長兼党組副書記の王翰（1911-1981、江蘇塩城人）も一二九戦士であった⁽⁹²⁾。黄秋耘は、同時代の戦友たちのうち、抗日戦争や解放戦争で犠牲になった楊学誠、孫世実らの烈士は死に場所を得たといえるが、「自己人（身内）」の監獄や労働改造所の中で亡くなった者もおおり、「われわれの頭上に落ちてくる、「自己人」の各種有形無形の銃弾と砲弾は敵側から飛んでくるものよりも少なかったとは思えない」と述べている⁽⁹³⁾。

おわりに

本稿は、2011年12月9日、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「長江流域社会の歴史景観」共同研究班での報告にもとづき執筆したものである。その際、以下の2点の指摘を受けた⁽⁹⁴⁾。

1. 韋君宜も、李慎之（1923-2003、江蘇無錫人）、李銳（1917-、湖南平江人）、何家棟（1923-2006、河南信陽人）、胡績偉（1916-、四川威遠人）、何方（1922-、陝西臨潼人）、于光遠、丁偉志（1931-、山東濰坊人）、李新（1918-2004、四川榮昌人）らの、いわゆる「オールド・ボルシェヴィキ」に位置づけられる。

2. 彼らは『百年潮』『黃炎春秋』などの媒体に回想と内省（共産党への暗黙の批判を含

む)を積極的に掲載し、中共の「共産主義」からの逸脱を指摘する一方、ゆるぎない「共産主義」の理想への信念はもっている。

たしかに韋君宜も、「私は古くからの忠実な共産党員である」(2頁。以下、頁数は前掲韋君宜『思痛録』のもの)とみずから語っているように、オールド・ボルシェヴィキでの1人であった。1936年5月入党の際に、中共への参加を志願し、共産主義の実現のため終生奮闘する、マルクス主義を信仰し、宣伝する、党の規律を遵守し、党のために工作する、永遠に党に叛かないと宣誓した⁽⁹⁵⁾以上は、忠実な共産党員であっただろう。

しかし、本稿において見たように、蔣南翔が死に際にも「共産主義を堅持せよ」と言ったような意味において、「共産主義」の理想への信念をもっていたかについては、韋君宜の場合は違うのではないかと考えている。

韋君宜が、「私は古くからの忠実な共産党員である」と言うのは、もう「来てしまった」からであり、韋君宜は反右派闘争中、黄秋耘に、「もしも「一二・九」の時に、こんなだと知っていたなら、私は絶対に来なかった」(45頁)と言っている。韋君宜は反右派闘争の時の思いについて、次のように述べている——私の心中の苦痛は最大限にまで達していた。私は若いころから革命に参加することを志し、旧世界を変革しようと志してきた……革命に参加した後で、さらにまだ正直な人間であろうとするかどうかの選択を迫られたのである。私は自分個人の運命を悲しむよりも、はるかに深くこの「革命」に心を痛めた(51頁)。

さらに『思痛録』前言で、共産党員になったのは家が貧しかったからでも、富豪に反対だったからでもなく、中国のために日本帝国主義に反対したかったからであり(2頁)、「入党を決意したあと、これまでに学んで得た全てを放棄した。私は学識の浅い戦闘者になることを心から願い、いささかの思慮もなく(後述するが、『思痛録』には北京十月文芸社版(以下、北京版)以外に複数の版本が存在する。下線部は北京版で削除され、天地図書版(以下、香港版)にのみ記された箇所を示す)レーニン、スターリン、毛沢東の述べる全てを信じて疑わなかった。それは私が崇拜することを誓った主義だったからである。私はこれまで信仰してきた民主思想を放棄しなかったし、自由な道を歩みたいと願ってもいた。しかし、共産主義信仰は私に何の理由もなしに世界の全ての素晴らしいものは、自由と民主も含めて、共産主義の中に含まれると認識させた。私はこのために共産主義真理の信徒となった」(3頁)とも書いている。

本稿で見えてきたとおり、韋君宜は、1934年末に参加した「現代座談会」が革命組織であったことも、蔣南翔をはじめ、その指導者らが共産党員であり、韋毓梅が共青团員で、清華大学の团支部書記であったことも知らずに、抗日がやりたくて活動に参加し、共産党に参

加するにいたったのである。

韋君宜は革命に参加して以来のすべてを、かつて孫世実と語り合い、思い描いていた「将来」を、中華人民共和国成立後の30余年を含めて、光明、理想、愛情、犠牲、残酷、愚昧、民族、国家、運命……の複雑に交錯したすべてを見た。その間の韋君宜が経験したあらゆる苦痛を感じることもなく、孫世実はいささかの疑念を抱くこともなく新中国のために死ねた。言い換えれば、このように人生を生きることができたなら、むしろ幸福ではないのか、彼をこそ羨むべきであり、悲しむべきではないと、韋君宜は思うにいたった。孫世実の思いもしなかった「将来」を生き延びた韋君宜は、この苦痛と、苦痛の根源である「私の信仰」についてまで思索した。ここでいう「信仰」とは、「党とマルクス・レーニン主義、指導者に対する信仰」である（117頁）。

韋君宜は、香港版『思痛録』前言で次のように述べている。

私はこの10年来の苦痛についてこのように一歩一歩思索し続けてきた。そして苦痛の根源——私の信仰について思索するまでにいたった。われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべてについて思索を続けてきた。思索そのものは一歩一歩進めてきたものであり、1日で書き上げたものでもない。内容の深さが異なっていることについては、自分でもわかっているが、今は元のままに従った。この根源について思索するのは後世の人に任せたい。彼らはわれわれのようであるべきか否か？私自身にいたっては、今でもまだ完全にすっかり話してしまいう見識と勇気を持っていない。私の思惟方法もこれらの問題について討論する理論的根拠と条理性に欠けている。私はやはりただ事実を述べ、雄弁にではなく事柄を以下のようにひとつひとつ並べるだけにする⁽⁹⁶⁾。

北京版『思痛録』前言には、この10年来の苦痛と、苦痛の根源である「私の信仰」について思索し続けた、とは記されず、「この10年余り、私はずっと苦しみながら回想し、反省し思索した」（4頁）に訂正されているが⁽⁹⁷⁾、北京版・香港版ともに「私の思惟方法もこれらの問題について討論する理論的根拠と条理性に欠けている」は記され、だからこそ『思痛録』では、1936年に中共に入党して以来の50余年におよぶ韋君宜の経てきた中共革命について、「ただ事実を述べ」、「事柄をひとつひとつ並べるだけにする」のだと言う。すなわち、「共産主義」の理想への信念をもち、共産主義を堅持すべしと言うのではなく、共産主義は駄目だと言っているのでも決してないが、しかし、共産主義がよいのかどうかをも含めて、自由と民主を実現しうるどのような思想・政体がありうるのか、後世の人々

に大本のところから考えてもらいたいと言っているのではないだろうか。

そして、「なぜ学業を、快適な生活を投げ捨て革命に身を投じたのか」(169頁)、歴史とはいったいどういうものかを考えながら、「われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべて」について思索を続け、文革後、60歳をとうにこえてから11冊もの著書を執筆し出版した。そのように苦難に満ちた生涯の中で、韋君宜が中共湖北省委員会で工作していたころだけは、理想に酔いしれていた最も楽しかった日々だったのである。

註

- (1) 韋君宜『思痛録』北京十月文芸出版社、1998年、123頁。
- (2) 韋君宜「我的文学道路」『老編集手記』四川人民出版社、1985年、80-81頁。
- (3) 韋君宜『似水流年』湖南人民出版社、1981年、は、文革終結後に出版された第2の単行本であり、最初の散文集である。しかし、文革終結後、最初に出版された『女人集』四川人民出版社、1980年、には文革後の作品が全17編中2編しか収録されず、基本的に文革以前の作品集である。『似水流年』は、文革後に書かれた作品が半分を占め、実質的には文革終結後に出版された最初の作品集だといえる。
- (4) 楠原俊代「韋君宜の著作における「歴史」の意味について」森時彦編『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所、2009年。
- (5) 未見、宋彬玉「烽火年華——韋君宜の青少年時期（上）」韋君宜在線紀念館 (<http://article.netor.com/m/jours/adindex.asp?boardid=9319&joursid=8628>、2011年9月24日 閲覧) による。
- (6) 前掲韋君宜「一段補白」30-31頁。
- (7) 「中共宜昌区委員会書記」は、前掲韋君宜「一段補白」24頁による。韋君宜「在錢大姐身边成長」『我对年轻人説』人民文学出版社、1995年、87頁には、中共宜昌区工作委員会書記と記す。ただし、中共湖北省委組織部・中共湖北省委党史資料徵集編研委員会・湖北省檔案館編『中国共産党湖北省組織史資料』湖北人民出版社、1991年、に、孫世実と韋君宜の名前は無い。
- (8) 前掲韋君宜「一段補白」28-29頁。
- (9) 前掲韋君宜「在錢大姐身边成長」87-88頁。「王翰年譜」『王翰伝』編写組『王翰伝』人民出版社、1999年、253頁には、「1938年10月25日、(王翰は)武漢における善後仕事を終え、錢瑛らの最後の一団とともに武漢から撤退する」と記されていることから、孫世実が武漢を離れたのは10月25日と考えられる。
- (10) 前掲韋君宜「一段補白」29-30頁。
- (11) 同前24頁。
- (12) 韋君宜「他走給我看了做人的路——憶蔣南翔」『海上繁華夢』人民文学出版社、1991年、199頁。以下、「憶蔣南翔」と略す。
- (13) 韋君宜「憶孫蘭——為紀念一二九運動而作」『似水流年』202頁。以下、「憶孫蘭」と略す。

孫蘭の本名は韋毓梅。

- (14) 韋君宜の経歴については、特に註記するもの以外は、すべて楠原俊代「韋君宜年譜」『吉田富夫先生退休記念中国学論集』汲古書院、2008年、による。
- (15) 前掲韋君宜『思痛録』42頁。
- (16) 韋君宜「“南開英才”毛榭」『我对年輕人説』5-6頁。前掲韋君宜「憶蔣南翔」184頁。
- (17) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」185頁。
- (18) 韋君宜「她死得好慘——哭韋毓梅」『我对年輕人説』9-10頁。以下、「哭韋毓梅」と略す。
- (19) 前掲韋君宜「憶孫蘭」199頁。
- (20) 同前198頁。前掲韋君宜「憶蔣南翔」185頁。
- (21) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」184、186頁。
- (22) 前掲韋君宜「憶孫蘭」199-200頁、前掲韋君宜「哭韋毓梅」9頁。
- (23) 「年譜」韋君宜在線紀念館 (<http://life.netor.com/m/lifes/adindex.asp?boardid=9319>、2011年11月21日閲覧)による。前掲宋彬玉「烽火年華——韋君宜的青少年時期(上)」では「8月20日」とする。
- (24) 前掲宋彬玉「烽火年華——韋君宜的青少年時期(上)」。「韋君宜」の名前の由来は不明であるが、同文によれば、1936年11月1日出版の『清華週刊』第45卷第1期に、「君宜」という筆名で散文「哀魯迅」を発表している。
- (25) 前掲韋君宜「在錢大姐身邊成長」85-86頁。
- (26) 同前86頁。
- (27) 前掲韋君宜「一段補白」25頁、前掲韋君宜「在錢大姐身邊成長」86頁。前掲「年譜」では、「宜昌区委員会において組織部長を務める」とする。
- (28) 前掲韋君宜「一段補白」25頁、前掲韋君宜「在錢大姐身邊成長」87頁。
- (29) 前掲韋君宜「在錢大姐身邊成長」86-87頁。
- (30) 同前89頁。
- (31) 同前87頁。
- (32) 前掲宋彬玉「烽火年華——韋君宜的青少年時期(上)」。
- (33) 宋彬玉「記青少年時期的韋君宜」『韋君宜紀念集』人民文学出版社、2003年、79頁。
- (34) 前掲韋君宜「在錢大姐身邊成長」88頁。
- (35) 韋君宜「八年行脚録」前掲『海上繁華夢』247頁。
- (36) 前掲韋君宜「在錢大姐身邊成長」89頁。
- (37) 前掲韋君宜「八年行脚録」247頁。
- (38) 中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』中共中央党校出版社、1986年、256頁には、「一二九」戦士は、八路軍と新四軍に駆け付けた者以外に、国民党統治区の工作においても相当大きな成果を上げた、と記す。
- (39) 同前243-244頁。
- (40) 同前245-246、250頁。
- (41) 前掲韋君宜「一段補白」25頁。前掲韋君宜「哭韋毓梅」10頁。
- (42) 金冲及主編『周恩来伝(1898-1949)』(修訂本)中央文献出版社、1998年、516-517頁、璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』中共党史出版社、1991年、142頁。
- (43) 前掲璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』145頁による。蓋軍主編『中国共産党白区闘争史』人民出版社、1996年、309頁には、1938年6月中共湖北省委員会は正式に成立、と記す。

- (44) 前掲璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』145頁。
- (45) 前掲蓋軍主編『中国共産党白区闘争史』309頁。
- (46) 前掲璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』152頁、前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』251頁。
- (47) 前掲蓋軍主編『中国共産党白区闘争史』316頁。
- (48) 前掲璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』152頁。
- (49) 前掲蓋軍主編『中国共産党白区闘争史』317頁による。前掲璞玉霍・徐爽迷『党的白区闘争史話』152頁には、各地の37の学連から100名余の代表が参加、と記す。
- (50) 前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』251頁。
- (51) 前掲蓋軍主編『中国共産党白区闘争史』319頁。
- (52) 前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』255頁。
- (53) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」187頁。
- (54) 「後書」前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』、前掲韋君宜「憶蔣南翔」198頁。ただし、「蔣南翔同志生平年表」中国高等教育学会・清華大学編『蔣南翔文集』下巻、清華大学出版社、1998年、1241頁には、蔣南翔は、1986年1月、全国省級党校校長座談会を主催、会議中、心臓発作を起こし北京医院に入院、と記す。
- (55) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」187頁。
- (56) 「除雲」は、「陳雲」の誤植と考えられる。
- (57) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」188頁。
- (58) 彭濤「關於“一二九”運動的回憶」中共北京市委党史資料徵集委員會編『一二九運動』中共党史資料出版社、1987年、316頁。
- (59) 李昌「回憶民先隊」同前372-373頁。
- (60) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」188頁。
- (61) 同前188-189頁。
- (62) 前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』256-257頁。
- (63) 黄宗江「思痛露沙路——讀韋君宜書」前掲『韋君宜紀念集』540頁。初出は『文匯報』1998年10月14日。
- (64) 「軍委分会關於目前華北戦争形勢与我軍任務的指示」中共中央文献研究室・中央檔案館編『建党以来重要文献選編(1921-1949)』第14冊、中央文献出版社、2011年、563頁。
- (65) 楊尚昆『楊尚昆回憶錄』中央文献出版社、2001年、175-176頁、中共中央文献研究室編『毛沢東年譜1893-1949』中巻、人民出版社・中央文献出版社、1993年、31頁。
- (66) 宋彬玉「韋君宜的人生之路」韋君宜在線紀念館 (<http://article.netor.com/m/jours/adindex.asp?boardid=9319&joursid=86493>、2011年11月16日閲覧) には、『一二九運動史要』は1987年に出版、と記す。
- (67) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」198頁。
- (68) 同前。
- (69) 同前198-199頁。
- (70) 前掲韋君宜「哭韋毓梅」9頁。
- (71) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」199頁。
- (72) 同前190-191頁。
- (73) 彭友今・蘇農觀「一個屈死的革命家——憶鄭代鞏同志」『貴州文史天地』1994年第3期、

- 17、19頁。黄秋耘『風雨年華』（増訂本）人民文学出版社、1988年、31頁。
- (74) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」191頁。蔣南翔の経歴については、前掲「蔣南翔同志生年表」と郝維謙・張思敬「蔣南翔」中共人物伝研究会編『中共人物伝』第69巻、中央文献出版社、2000年、を参照。
- (75) 前掲韋君宜「憶蔣南翔」192頁。但し、同197-198頁で韋君宜は、反右派闘争の時に、清華大学校長であった蔣南翔が右派を認定したことについては、どうしてなのかいまだに納得がゆかないと述べている。前掲「蔣南翔同志生年表」に、反右派闘争についての記述はないが、前掲郝維謙・張思敬「蔣南翔」220頁には、「蔣南翔は後に自己批判をした」と記されている。
- (76) 前掲韋君宜「哭韋毓梅」9、12頁。
- (77) 前掲韋君宜『思痛録』117頁。
- (78) 前掲韋君宜「哭韋毓梅」10-11頁。
- (79) 前掲韋君宜「憶孫蘭」201頁。
- (80) 韋君宜が「走資派の誤りを犯した」幹部として解放されたのは、1971年末。
- (81) 前掲韋君宜「憶孫蘭」201頁。前掲韋君宜「哭韋毓梅」12頁。
- (82) 前掲韋君宜「憶孫蘭」202頁。
- (83) 前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』第12章「鮮花掩蓋着志士の鮮血」は、韋君宜が手を入れ最終稿を作成したと注記して、「鮮花掩蓋着志士の鮮血——緬懷在抗日戰爭中獻出生命的“一二九”運動戰士」のタイトルで『我对年輕人説』に収録されている。
- (84) その他に、一二九運動で亡くなった同志4人の名前も記されている。
- (85) 前掲中共中央党校党史研究班編『一二九運動史要』267頁。
- (86) 李盛平主編『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、1989年、によれば、王文彬は、「一二九運動に参加、1936年北平学連宣伝部部長、同年6月中共入党。1937年11月蘇北に行き、中共徐州特別委員会秘書、中共徐西北区委員会書記、湖西地区の抗日武装蜂起を指導。蘇魯人民抗日義勇隊第二総隊政治委員、中共蘇魯豫特別委員会書記。1939年中共蘇魯豫区委員会統戦部部長、同年9月湖西「肅托（トロツキスト肅清）」中、無実の罪で殺害された」。このことから、王文彬が「1938年武漢で全国学連大会開催準備の責任者だった」というのは、韋君宜の記憶間違いかもしれない。
- (87) 前掲韋君宜『思痛録』168頁。
- (88) 胡昇華「葉企孫先生与“熊大績案”」『中国科技史料』1988年第3期、27、33頁。散木「一個甲子前的冤案——説熊大績」『博覽群書』1999年第12期。
- (89) 前掲韋君宜『思痛録』163、168-169頁。
- (90) 前掲韋君宜「憶孫蘭」197頁。
- (91) 同前202頁。
- (92) 前掲『王翰伝』。韋君宜「紙墨長留負疾心——敬悼王翰、張清華夫婦」「王翰伝」『故国情』百花文芸出版社、1985年。
- (93) 前掲黄秋耘『風雨年華』（増訂本）31頁。
- (94) 現代中国研究センターの石川禎浩教授からいただいた指摘である。
- (95) 入党の儀式と誓詞については、韋君宜『母与子』上海文芸出版社、1985年、267-268頁に詳細に記されている。
- (96) 韋君宜『思痛録』天地図書、2000年、7頁。

(97) 韋君宜の『思痛録』には、北京版（北京十月文芸出版社、1998年）、香港版（天地圖書、2000年）、最新修訂版（『思痛録・露沙的路』文化芸術出版社、2003年）がある。北京版は発売直後からベストセラーとなり、「韋君宜現象」ともいわれる文化現象が起き、「1998年十大好書」の第1位にも選ばれた。ところが香港版が出版されたことによって、北京版では削除された部分があることが明らかになった。香港版が韋君宜の原文に最も近いものである。

そこで筆者は、『思痛録』の翻訳・注釈を「韋君宜回想録」と題して『言語文化』（同志社大学言語文化学会）に2000年から2007年まで、12回にわたって連載したが、香港版を入手した「韋君宜回想録」(3)以降は、香港版によって訳出し、北京版との異同を注記した。また、特に削除がはなはだしい、前言、第1章、第2章については、楠原俊代「中国共産党の文芸政策に関する一考察——『思痛録』をてがかりに」森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所、2004年、と、前掲楠原「韋君宜の著作における「歴史」の意味について」の中で考察し、「中国共産党の文芸政策に関する一考察」375頁では、北京版で削除されている箇所について、「もっとも特徴的なのは毛沢東個人に対する批判とそこから出てくる中共批判、政策・運動の中身についての詳細な記述の部分である」と述べている。

この問題は、福岡愛子『文化大革命の記憶と忘却』新曜社、2008年、でも言及されている。同書270頁で、北京版における「削除が顕著になるのは胡風批判運動に関する第3章からである」と記しているが、それは間違いである。

また、同書251頁では、1998年と2003年に出版された『思痛録』を、どちらも北京版と言い、さらに同書269頁で、北京版・香港版の、「二つの版の比較によってまず目立つ差異は、北京版全十七章にたいし香港版は全十六章、という章構成の違いである」と言うが、全17章は最新修訂版のみで、1998年に出版された北京版は、香港版とまったく同じ全16章である。ベストセラーになって大きな反響を呼んだのは1998年の北京版であるから、香港版と比較すべきは1998年の北京版であろう。最新修訂版の前言には改編が加えられ、韋君宜の原文からさらに遠ざかってしまったことについては、すでに前掲楠原「韋君宜の著作における「歴史」の意味について」488頁で述べた。最新修訂版の意義は、章詒和の回顧録が発禁となったり、戴煌『九死一生——我的「右派」歷程』の改訂版を出版しようとしたところ発禁にされたりするなかで、『思痛録』と、はじめて抢救運動の描かれた小説『露沙的路』があわせて再版されたことにある。

福岡は「北京版における削除には一定の規則性がみられる」として、その特徴を以下の4点に分類し、削除された部分を引用しながら、269頁から275頁まで約6頁にわたって述べている。

- (1) 特定の人物（毛沢東）への言及
- (2) 著者の推測・判断にもとづく記述
- (3) 著者の見聞、すなわち二次情報の記述
- (4) その他（国家、党、社会主義への言及）

しかし北京版『思痛録』では、上の(2)と(3)を理由として削除がなされたとは考えられない。同書272頁にあげられた具体例は、著者の推測・判断にもとづく記述だから削除されたのではなく、毛沢東と中共への言及のために削除されたものと言える。

そのすぐ後の276頁で、「前項であげた削除に関する四つの特徴をもう一度読み直してみると以下の3点にまとめなおすことができる。すなわち、①毛沢東に関する批判的な叙述、②解放軍の醜聞暴露、③政治運動や国家・党・社会主義にたいする著者独自の批判的見解を

述べた箇所、である。そこから、毛沢東や解放軍が神聖化され、個人は「大きな物語」を批判的に語る資格を有しない、という規範の存在が浮かび上がる」と、わずか4行でまとめなおしている。それならば、その直前の、4点の分類は不要ではないのか。

さらに同書275頁には、『思痛録』初版が1998年5月に出版された際、「責任編集者」であった丁寧の名前で、巻末に説明文が付されていた、と記すが、同書の巻末に付された「必要的説明」の作者は、『思痛録』の出版元を探すよう依頼されていた牧恵であり、丁寧の文章は収録されていない。牧恵の「必要的説明」によれば、韋君宜は病気のため、もはや原稿の最後の見直し、削除や補充をする力もなく、この作業は原稿を保管してきた牧恵がおこなわざるをえなかった、彼は、韋君宜にかわって文中の誤記や不適切な箇所の訂正をおこなった、と言う。

